FAIRY TAIL ～妖精の化物《フェアリーモンスター》～

天翔る堕天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ　～妖精の化物（フェアリーモンスター）～

【Ｎコード】
Ｎ４５６３Ｚ

【作者名】
天翔る堕天使

【あらすじ】
ある日、俺は大学から帰ってきて直ぐに昼寝をしていたはずだった。目が覚めたらそこには神様が座っていた。
神様のミスで死んでしまったために、俺は他の世界に転生してそこそこ暴れます。
※作者はかなりの初心者です。
駄文や、少ない戦闘描写は多めに見て下さい。

～ プロローグ的な ～（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。（キリッ？
今回が始めての投稿になるので、暖かく見守ってください。（＜＿＞）

では、どうぞよろしくお願いします。

～ プロローグ的な ～

目を覚ますとそこは白をモチーフにした落ち着いた感じの部屋だった。

俺
「見覚えのない天井だ。」

よし、間違えたからもう1回言い直すか。

俺
「見覚えのない天井だ。」

さて、こういう場面にはこんな感じのお約束がある筈だ。

確か俺は、大学から普通に帰って来てすぐに睡眠をとっていたのに、何故か起きたらこの部屋にいた。

少し警戒しながら辺りを見回すと、色々な家具が数点、観葉植物が2つ、そしていかにも神様のような感じがする、白いローブを着た男の子が1人椅子に座っている。

俺
「どゆこと？」

神様
「気がついたかな～？ちなみに僕は神様だよ～。よろしくね、お兄さん！。」
俺
「よろしく。」
神様
「お兄さんって～かなり落ち着いてるよね～普通なら～軽くパニックはおこるよ～？」
俺
「残念ながら俺はそういう小説とかを読んでたから　？　？　？　？　？　ん？そういえば神様、俺が死んだ覚えが無いんだが。」
神様
「はい、それは僕が～誤ってジュースを溢(こぼ)して～濡らしちゃったから～それを乾かす為に、ストーブに近付けたら～灰にしちゃったんだ～。」
「たぶん～そのせいで気がつく前に～死んじゃったのかな～。」
「だから～、謝罪と一緒にどこか好きな所に転生させようと～思って呼んだんだよ～。」
俺
「Ｏｈ？　？　？　？　？　」

つまり俺は今、目の前に座っている子のおっちょこちょいな、神様(ドジッコ)のミスで死んだらしい　？　？　？　？　？

俺
「じゃあ早速(さっそく)で悪いけど、『ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ』によろしく。能力とかはどうすればいい？」
神様

「う～ん、そうだな　？　？　？　？　？　能力は５個と～特殊アイテム１個にしようかな～」

５個か　？　？　？　？　？　何にしようか　？　？　？　特殊アイテムもどうするかな　？　？　？　？　？　？　。

～～～～～５分後～～～～～

俺

「決まったから言うぞ」

神様

「い～よ～」

俺

「　１個目は、『とある魔術の禁書目録（インデックス）』に出てくる、一方通行（アクセラレータ）のベクトル操作能力が使用可能。

２個目は、『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』に出てくる、覇王色、武装色、見聞色、の３種類の覇気が使用可能。

３個目は、海外ゲームの『Ｐｒｏｔｏｔｙｐｅ』にでてくる、アレックス・マーサーの全能力ＭＡＸ状態。

４個目は、１万年に１歳（さい）だけ歳（とし）をとり、尚且（なおか）つ２９歳になると老けなくなる。

５個目は、丈夫な身体　」

特殊アイテムは、【死んで無い限りならどんな病（やまい）でも治せる薬】で、形はなるべく簡単に運べる位の大きさ。」

神様

「じゃあ送るよ～　？　ふぅ、オマケとして～1個目の願い事には触るだけで成分とか～色々と理解が出来るようにしといたから～」

「あとこれが～さっき言ってた～お薬だよ～」つ薬

俺

「ありがとう」

神様

「じゃあ～そろそろ【ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ】の世界に～行ってもらいま～す。それとこれを～落とさないで持っててね～。」

そして何かを渡してきた、これは　？　？　？　？　？　？

携帯電話？

神様

「じゃっ　？　？　？　？　？　行ってら～」ガチャン←

パカッ

俺

「えっ？」

ヒューーーーーーーーーーン

俺

「ッーーーーーー！！！！！！」

神様

「あっ」

～俺ＳｉｄｅＯｕｔ～

～　プロローグ的な　～（後書き）

如何でしたか？（（（（；　。Д　。））））

かなり心配ですが、読者様の感想や、厳しい指摘を待っております。

次回は主人公の詳しい能力を書いていきます。

ではまた会う日まで（　，　▽　、　）ノシ

Ｂｙ天翔る堕天使より。

主人公の説明や、細かい能力の説明（前書き）

どうも、天翔る堕天使です（キリッ！

今回はオリ主の能力説明なんですが、かなり長いのでザックリと軽く見て下さい。

ではどうぞ（，　▽　、　）ノ

主人公の説明や、細かい能力の説明

名前　？　？　？　？　？　？　アレックス　？　マーサー
※次回からは、『俺』から『アレックス』と書き換えます。
性別　？　？　？　？　？　？　？　？　男性
一人称　？　？　？　？　？　？　？　？　俺
容姿
【服装】　？　？　？　？　？　？　革ジャン〔黒〕＋フード付きジャンパー〔茶〕＋襟付きの長袖シャツ〔白〕＋ジーパン〔青〕＋革靴〔黒〕
【目】　？　？　？　？　？　？　青色
【髪】　？　？　？　？　？　？　茶色
【身長】？　？　？　？　？　？　１８０センチ
【体重】？　？　？　？　？　？　８０キロ
【年齢】？　？　？　？　？　？　２２歳
備考
・身長と体重は、自分の現在の状況。（笑）
・年齢は原作に合わせる為に、減らしました。

〜〜〜〜〜〜１個目の能力説明〜〜〜〜〜〜
一方通行（アクセラレーター）のベクトル操作能力。
運動量・熱量・光・電気量ｅｔｃといった、ありとあらゆるベクトル（向き）を観測し、触れただけで変換する能力。
普段は『反射（ベクトルの反転）』に設定されており、　身体の周

囲を覆(おお)うわずかな保護膜(ほごまく)に触れた全ての攻撃を、自動的に跳ね返してしまう。
保護膜に接してさえいれば密着していなくともベクトル操作が可能であり、『膜に接触している』巨大な物体として、暴風操作や自転の操作を行うことすら可能である。

受動的な『反射』だけではなく能動的な能力としても優秀で、血流逆転・体内電流操作による心臓麻痺や洗脳、鉄柱飛ばし・身体運動増幅・風向操作によるM7クラスの暴風、竜巻、飛行・高電離気体・再生促進・自転操作・レールガン以上の速度の石礫？？？？？？など戦闘方面に限らず多岐にわたる応用が可能。

感知能力でもあるため、低周波や放射線など五感で認識できないベクトルも観測できるし、変換できる。
反射といっても万物を拒絶しているわけではなく、物理法則に従って有害と無害のフィルタを無意識のうちに構築し、生活に必要なもの（必要最低限の酸素や重力等）は反射しないようにして、『それ以外の全てのベクトル』を反射するように設定されている。
自分の意思次第で、有害な音なども反射可能。そのため未知の力であっても『それ以外のベクトル』と認識して反射可能である。

〜〜〜〜〜〜2個目の能力説明〜〜〜〜〜〜
『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』に出てくる、覇王色、武装色、見聞色、の3種類の覇気。

～相手の”気配”をより強く感じる力、それが”見聞色”の覇気～
これを高めれば視界に入らない敵の位置、その数・・・更には次の瞬間に、相手が何をしようとしているのかを読み取れる。

～”見えない鎧を着るようなイメージ”を持ち、より固い鎧は必然的に攻撃力にも転じる～
実体が無いものに対して、攻撃ができる。この”武装色”の覇気がこの世で唯一の対抗手段であるということ。
この力は武器に伝わせることもできる。

～相手を威圧する力・・・”覇王色”の覇気・・・！！～
この世で大きく名を上げる様な人物は、およそこの力を秘めている事が多い。
ただし　この”覇王色”だけはコントロールはできても鍛え上げる事はできない、”本人の成長でのみ強化する”。

～～～～～～3個目の能力説明～～～～～～
『Ｐｒｏｔｏｔｙｐｅ』の、アレックス・マーサーの全能力ＭＡＸ状態。
変装　？　偽装系
？　？　？　ＡＬＥＸ

変装を解いてアレックス本来の姿に戻る。

？　？　？　ＤＩＳＧＵＩＳＥ（変装）

あなたが接触した人誰でも吸収し変装出来る能力です。
吸収する事によりその人物の特殊技能、知識、　及び外見へのアクセス能力をアレックスに与えます。

【ＤＩＳＧＵＩＳＥ】

■　ＣＯＮＳＵＭＥＰＯＷＥＲ

捕食能力

■　ＣＯＮＳＵＭＥ　ＢＯＯＳＴ

捕食時の体力回復量が増加する。

■　ＳＴＥＡＬＴＨ　ＣＯＮＳＵＭＥ

［ステルスしながら］

目標が声を上げる前に、速やかに捕食する。
発動するためには、捕食対象を含む周囲のすべてが、　アレックスのことを視認していない状態でなければならない。

■　ＤＩＳＧＵＩＳＥ　ＰＯＷＥＲ

変装能力

防御系

？　？　？　ＡＲＭＯＲＥＤＦＯＲＭ（装甲形態）

バイオマスを身体表面に噴出させ、強固な防弾能力を発揮します。
　鎧兜の様なこのフォームで体を覆えば、
眼前の敵を粉砕し、　最も強力な攻撃でさえ無効にする、止める事の出来ない力を得られます。

■　ＡＲＭＯＲＥＤＦＯＲＭ

全身を装甲で覆うことにより、全方向からのダメージを軽減し、
ダッシュ時に敵や車両を吹き飛ばし、ダメージを与えることが出来る。

発動中は移動速度が低下し、　ＧＬＩＤＥ（グライド）が使用不可能になる。

？　？　？　ＳＨＩＥＬＤ（シールド）（盾（たて））

左腕をバイオマスで形成された骨状のシールドに変える事ができる。

［今回は、ご都合主義で両腕でもできるようにしました。］

■　ＳＨＥＬＤＰＯＷＥＲ（シールドパワー）

前面に盾を形成し、前面からの攻撃を大きく減衰するほか、　ダッシュ時に敵を吹き飛ばし、ダメージを与えることが出来る。

防御力はＡｒｍｏｒｅｄＦｏｒｍより高い。

発動中にＧｌｉｄｅを使うことが出来るため、Ｃｏｍｂａｔスキルの奥義Ｂｕｌｌｅｔ Ｄｉｖｅを活用できる。

移動速度の低下も発生しないため、機動戦に向いている。

攻撃系（こうげきけい）

？　？　？　ＢＬＡＤＥＳ（ブレイズ）（刃（やいば））

右腕を一度で５、６人の敵を切る事が出来る骨状のブレードに変える事により、　敵を真っ二つに切断する事が出来ます。

［今回は、ご都合主義で両腕でもできるようにしました。］

■　ＢＬＡＤＥ（ブレード）　ＡＩＲ（エア）　ＳＬＩＣＥ（スライス）

ブレードを大きく振りかぶり、地面に向かって叩きつける。　下方向への追尾性能は高い。

■　ＢＬＡＤＥ（ブレード）　ＦＲＥＮＺＹ（フレンジー）

走りながら左右にブレードを振り回す。　追尾性能はそれほど高くない。

？　？　？　ＣＬＡＷＳ（鉤爪）

アレックスの手は相手に致命傷を負わせる事の出来る骨状の鉤爪へと変わり、　変形後の彼は即死を与える殺人マシーンと化します。

■　ＣＬＡＷＳ　ＰＯＷＥＲ

攻撃力は並だが、振りが素早く、少数の人型敵と戦うのに向いているが、

ＧＲＯＵＮＤＳＰＩＫＥ以外に目立った対装甲能力を持っていないのが欠点。

■　ＧＲＯＵＮＤＳＰＩＫＥ

地面に腕を突き刺し、離れた地面から棘を噴出させてダメージを与える。

また、上方向に突き上げる力が強く、対象相手の姿勢を大きく乱すことが可能。

■　ＤＡＳＨＩＮＧＳＬＩＣＥ

［ダッシュ中］

地面を滑るように移動し、爪で一発だけ薙ぎ払う。　攻撃力はそこそこだが、非常に高い追尾性能を持つため、

敵と交差するように使うと、敵の背面まで回って斬りつけるような機動を取る。

？　？　？　ＨＡＭＭＥＲＦＩＳＴ（鉄槌拳）

数百ポンドものバイオマスの塊を両方の拳に移行させる事により、　鋼や人骨すらも粉々に破壊する巨大なハンマーへと変わります。

■　ＨＡＭＭＥＲＦＩＳＴＰＯＷＥＲ

攻撃力は高く、攻撃速度はかなり遅めだが、極一部の攻撃以外は範囲攻撃能力を持っており、　振り回してるだけで周囲の物を吹き飛ばしまくる。

ノーマルアタックによるコンボは、３段階目の打ち上げ以外は全て範囲攻撃。

■　ＨＡＭＭＥＲＦＩＳＴＳＭＡＣＫＤＯＷＮ（ハンマーフィスト）（スモークダウン）

大きく力を貯めて、地面に向かってハンマーを叩き付ける。

ダメージは見た目ほど強くはないが、非常に広い攻撃範囲を持つため、

周囲を囲まれた状態で威力を発揮する。

■　ＨＡＭＭＥＲＦＩＳＴＥＬＢＯＷＳＬＡＭ（ハンマーフィスト）（エルボースラム）

［ジャンプ中］

下方の敵に向かって飛び込み、強烈な肘打ちを繰り出す。

ダメージはそこそこといった感じだが、追尾性能と攻撃範囲はかなり強力。

■　ＨＡＭＭＥＲＴＯＳＳ（ハンマートス）

［ダッシュ中］

ハンマーを突きだしたまま、走行中の勢いを利用して敵に飛びかかる。

ハンマーは敵の懐に入れないと真価を発揮できないため、　敵集団に突撃を掛けるときには有効に働く。

？　？　？　ＭＵＳＣＬＥＭＡＳＳ（マッスルマス）（筋力増強）（きんりょくぞうきょう）

アレックスの腕の筋力を増強させ、両腕の力の焦点を合わせる事で敵により大きなダメージを与えられます。

■　ＭＵＳＣＬＥＭＡＳＳＰＯＷＥＲ（マッスルマス）（パワー）

素手状態の攻撃ダメージを強化。

戦闘中に発揮できる機動性能は全能力中随一。

■　ＭＵＳＣＬＥＭＡＳＳＴＨＲＯＷ（マッスルマス）（スロー）
Ｍｕｓｃｌｅ Ｍａｓｓ発動中は、投擲によるダメージと投擲射程を強化する。

？　？　？　ＷＨＩＰＦＩＳＴ（ウィップ）（鞭（むち）の腕（うで））
素早く襲いかかる事が出来る非常にシャープな鞭は敵を半分に切り裂き、　離れた場所にいる敵を引っ張ります。
［今回は、ご都合主義で両腕でもできるようにしました。］
■　ＷＨＩＰＦＩＳＴＰＯＷＥＲ（ウィップ）（フィストパワー）
横方向への範囲攻撃と、奥行きに対する長射程攻撃に関してはまさにエキスパート。
非力そうな印象とは裏腹に、十分な攻撃力を備えており、　驚くほどの射程もある。
そして威力も高めなので、離れた場所にいる敵に対して有効。
■　ＳＴＲＥＥＴＳＷＥＥＰＥＲ（ストリート）（スイーパ）
横方向に大きく腕を振るうことで、周囲の敵を両断する。
これまた、技の印象とは裏腹に威力が高く、敵を一掃するほどの破壊力を持つ。
■　ＬＯＮＧＳＨＯＴＧＲＡＢ（ロングショット）（グラブ）
腕を伸ばし、遠方の目標を掴む。
軽い目標は引き寄せ、重目標は自分がその場まで飛んでいく。

視覚感知系（しかくかんちけい）
？　？　？　ＴＨＥＲＭＡＬＶＩＳＩＯＮ（サーモ）（ビジョン）（熱源視覚（ねつげんしかく））
サーマルビジョンは、あなたの視界が狭くなるリスクと引き換えに、煙で覆い隠された場所や障害物が有る場所での見通しをよく

する事が出来ます。

■　ＴＨＥＲＭＡＬＶＩＳＩＯＮＰＯＷＥＲ（サーモビジョンパワー）

煙幕効果を遮断したり、感染者を見分けやすくする。

？　？　？　ＩＮＦＥＣＴＥＤＶＩＳＩＯＮ（インファクティッドビジョン）（感染者視覚）

あなたの視覚を変更して、潜行性の感染症が人々に忍び寄るのを検出して下さい。そうする事で、激しい感染を標識の様に際立たせ、ウイルスに汚染された目標を明らかにする事が出来ます。

［今回は、ご都合主義で『ウイルス』＝『風邪とかのウイルス』ということで、ご理解して下さい。］

～～～～～～～『特殊能力』～～～～～～～

【ＭＯＶＥＭＥＮＴ（ムーブメント）】

ｏ　ＡＩＲＵＰＧＲＡＤＥＳ（エアアップグレード）

■　ＡＩＲＤＡＳＨ（エアダッシュ）

［ダッシュ（空中）］

空中で大きく加速する。　加速度が非常に高いため、Ｇｌｉｄｅと組み合わせると、地上を走るより速く移動できる。

ＡＩＲＤＡＳＨＤＯＵＢＬＥ（エアダッシュダブル）

Ｄｏｕｂｌｅで二回までダッシュ可能になる。

■　ＡＩＲＤＡＳＨＤＯＵＢＬＥ（エアダッシュダブル）　ＢＯＯＳＴ（ブースト）

［ジャンプ＋ダッシュ］

をすると、上方向に向かって大きく飛び上がる。

■　ＧＬＩＤＥ（グライド）

［ダッシュ＋ジャンプ（空中で）］
両手を広げて滑空状態になることで、より長時間滞空することが出来る。
グライドは空中にいる間は何度でも発動できるため、［エアダッシュ→グライド→エアダッシュ→グライド］をやることで、ほとんど高度を落とすことなく高速移動をすることが出来る。ただし、飛翔ではなく滑空のため、永遠に飛ぶことは出来ない。

■ AIRRECOVERY（エアリカバリー）
［ジャンプ（吹き飛ばされ中に）］
吹き飛ばされた際に身を捻り、素早く通常状態に復帰できる。
被迎撃後にダッシュやグライドを使って回避運動を取れるため、文字通り、態勢を立て直すのに有用。

o SPRINTUPGRADES（スプリントアップグレード）
■ DIVEROLL（ドライブロール）
［ダッシュ（移動中に）］
前転。通常状態で出したい時はダッシュ後すぐ離すと出る。だがこのスキルの真髄は、様々な攻撃をキャンセルできる点だろう。立ち通常はほぼ全てのフォームでキャンセル可能なので敵が振りかぶったのを見てから回避運動が出来るようになる。

■ SPRINTSPEED（スプリントスピード）
地上での走行速度が強化される。

o JUMPUPGRADES（ジャンプアップグレード）
■ JUMPUPGRADE（ジャンプアップグレード）
チャージジャンプによる飛距離が伸びる。
ジャンプ高度が上がる＝グライドで長時間飛行できる＝より高速で

移動できる　、ということ。

■　WALLJUMPLATCH（ウォール　ジャンプラッチ）

［ジャンプ（壁際で）］

壁を使った三角飛びを、何度でも使用できるようにする。

【SURVIVABILITY（サバイバルティー）】

o　CRITICALMASSUPGRADES（クリティカル　マスアップ）グレード》

■　ADRENALINESURGE（アドレナリン　サージ）

アレックスが死亡寸前まで追い詰められると発動する。　アレックスは短時間の間、完全な無敵状態となる。

o　HEALTHUPGRADE（ヘルス　アップグレード）

▲　HEALTHBOOST1（ヘルス　ブースト）

自動回復能力：小～中

▲　HEALTH　《ヘルス》BOOST（ブースト）　2

自動回復能力：中～大

o　HEALTHREGENERATION（ヘルス　リジェネィション）

■　REGENRATEBOOST（リジェネィション　ブースト）

アレックスの体力が一定値以下を切ったとき、体力が自動的に回復するようになる。　Boostを重ねていくことで、自動回復可能な体力上限値が高まっていく。

■　REGENRATEDelay（リジェネィション　ドレイ）

ダメージを受けてから、自動回復が始まるまでの時間を短縮する。

【COMBAT（コンバート）】

o　AIR（エア）

■　ＦＬＹＩＮＧＫＩＣＫＢＯＯＳＴ（フライングキック）（ブースト）

ＦｌｙｉｎｇＫｉｃｋによる射程と威力を強化する。　ＦｌｙｉｎｇＫｉｃｋは全編通して利用することになるため取得は必須。

■　ＦＬＩＰＫＩＣＫＬＡＵＮＣＨＥＲ（フリップ）（キック）（ランチャー）［ＦｌｙｉｎｇＫｉｃｋがヒット中］

ＦｌｙｉｎｇＫｉｃｋがヒットした瞬間、左足でも敵を蹴り上げることで、　追加ダメージを与えると共に、軽量の目標を吹き飛ばすことが出来る。

単純に、ＦｌｙｉｎｇＫｉｃｋを強化できるスキルと考えれば、取らない理由はない。

■　ＦＬＹＩＮＧＥＬＢＯＷＤＲＯＰ（フライング）（エルボー）（ドロップ）

［壁走り中］

下方向に向かって、肘を突き出したまま落ちる。

■　ＢＯＤＹＳＵＲＦ（ボディーサーフ）

［人間限定］

ＦｌｙｉｎｇＫｉｃｋの勢いを利用し、飛びかかった相手に乗って移動する。　早い話、ＦｌｙｉｎｇＫｉｃｋを当てた相手の、前方にいる敵を巻き込むスキル。

移動距離はちょっと短く、巻き込むことが出来る敵はそんなに多くない。

■　ＡＩＲＳＴＯＭＰ（エアスタンプ）

［空中で］

直下に向かって急降下し、衝撃波を発生させる。キックと違い、全く追尾無しで直下に降りるため、

もっぱら、攻撃目的よりは急降下するための手段として利用することが多い。

■　ＣＡＮＮＯＮＢＡＬＬ（キャノンボール）

［空中で］

空中で高速回転しながら、対象に向かって突撃し、対象と周囲の物体を破壊する。

また、対象の間にある軽目標は弾き飛ばしながら移動する。

高威力・範囲効果に加え、貫通効果までついたＦｌｙｉｎｇＫｉｃｋの上位互換。Ｆｌｙｉｎｇ Ｋｉｃｋの後に続けて出すことも可能なため、空中二段攻撃が可能になる。

■　ＢＵＬＬＥＴＤＩＶＥＤＲＯＰ（ブレッド ダイブドロップ）

［Ｇｌｉｄｅ中に］

直下に向かって急降下し、非常に広い範囲に渡って衝撃波を発生させ、高空から発動することで、威力と攻撃範囲が増す。

Ｍｕｓｃｌｅ Ｍａｓｓ発動中なら、さらに威力と攻撃範囲が増す。

■　ＳＰＩＫＥＤＲＩＶＥＲ（スパイクドライバー）

両手を振りかぶって、対象を地面に叩き付ける。　アッパー→エアコンボの後にしか発動できない特殊なスキル。

ｏ　ＡＲＥＡＥＦＦＥＣＴ（エアエフェクト）

■　ＧＲＯＵＮＤＳＨＡＴＴＥＲ（グランドサター）

地面を思いっきりブッ叩き、衝撃で対象を空に吹き飛ばす。

■　ＧＲＯＵＮＤＳＨＡＴＴＥＲＤＲＯＰ（グランド サタードロップ）

［空中で］

ＧｒｏｕｎｄＳｈａｔｔｅｒの空中版。

高空から発動することで、威力と攻撃範囲が増加する。やや緩やかではあるが、下方向に向かって加速する性質がある。

ＧｒｏｕｎｄＳｈａｔｔｅｒより打ち上げる力が強く、大きな相手

の姿勢を崩すほどの衝撃を発生させる。

■　KNUCKLE（ナックル）SHOCKWAVE（ショックウェーブ）

［グラブ］

拳を打ち鳴らして衝撃波を起こし、周囲の対象を弾き飛ばす。

■　GROUND（グランド）SPIKE（スパイク）GRAVE（グレイビヤー）YARD（ーラ）DEVASTATOR（ダブスティ）

地面から巨大な棘を何本も突き出し、あらゆるものに致命的なダメージを与える。　かなり広い攻撃範囲と、極めて高い攻撃能力を持つ大技。

■　TENDRIL（テンドゥロー）BARRAGE（ブラージ）DEVASTATOR（ダフスティーラ）

全身から触手状の体細胞を幾重にも突き出すことで、周囲の目標を串刺しにする。　あらゆるスキルの中でも最も広い攻撃範囲を持ち、攻撃力も非常に高い。

威力はGroundspike　Graveyard　Devastatorには劣る。

o　GRAPPLE（グラップル）

■　GRAPPLE（グラップル）　SLAM（スラム）

［人型の敵をグラブ中に］

掴んだ人型の敵を地面に向かって叩き付け、衝撃波を発生させる。

POWER　BOMBと同様の対人専用スキルのため、オーバーキルの傾向が強くて使い道に困る。

■　POWER（パワー）　BOMB（ボム）

［スペシャル（人型の敵をグラブ中に空中で）］

敵を引っ掴み、地面に向かって急降下して地面に叩き付ける。範囲攻撃能力のある投擲技の一種。

～～～～～～４個目と５個目の能力説明～～～～～～
そのままの意味です。

～～～～～～特殊アイテム～～～～～～
【大きさ】？　？　？　？　？『○ｉ○ｋ○』程の大きさ
【内容量】？　？　？　？　？　２０粒
【オマケ機能】？　？　？　？　？　１ヶ月おきに、自動で補充される。ただし、２０粒以上は増えない。
【入れ物】？　？　？　？　？　？　『○ｉ○ｋ○』の入れ物

主人公の説明や、細かい能力の説明（後書き）

どうでしたか？（（（（（；゜Д゜））））
自分のユーザーページーに、逆お気に入りが２人もいたのでうれしいです。（＾―＾）

次回は本編に進む前のお話です。上手く書けるか分かりませんが、頑張ります。
ゞ（@ー（@）ノ
ではまた、次回にお会いしましょう。

ｂｙ天翔る堕天使より。

第０００．１話　その後（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。
３回目がやっと書き終わりました。
ゞ（@｀ー｀@）ノ
？　？　？　？　？　？　？　？　何を言えばいいか分かりませんので、始まります。

第０００．１話　その後

～Ｓｉｄｅ　神

「あ、どうしよ～座標少しずれちゃったけど～大丈夫かな～？」
？？？

「神様、よろしいでしょうか。」
神様
「ん～？どったの～秘書さん？」
秘書
「はい、先程の人物に渡した内容で最初に叶えた能力に少々ながら不備が有りました。
こちらがその不備のあった詳しい内容です。」つ紙
神様
「は～い」
秘書
「それと、転生した先の時間が決まっていなかったので、原作突入の7年前しておきましたがよろしかったでしょうか？」
神様
「い～よ～。じゃぁ～この事あの人に送ってといてね～。」
秘書
「わかりました。」ペコリ

こうして神様の心配事も無くなって（？）、いつもの仕事を始めました。
秘書さんは手紙を転送して、こちらもいつものように仕事を始めました。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

～Ｓｉｄｅ　アレックス

気が付くと穴の中を落ちていた。
清々しい程の笑顔で送られて来たが、ほぼ垂直に落ちてるからメチャメチャ速い。そして最後に神様の口から聞いた、

神様
（「あ」）

が未だに気になっている。
そうしている内に、足下が少し明るくなってきた。俺は、恐る恐る下を見ると出口なのか綺麗な雲１つ無い青い空が見える。

アレックス
「はぁ？　？　？　？　？　？　？　空？？？」

そこを抜けると遥か上空だった。
思考が一旦停止したのは言うまでもないし、しょうがないと思う。
例えで言うと、『パラシュート無しでスカイダイビング』みたいな感じ。

アレックス

「くそぉーーーーまだ落ちるのかよーーーー！」

少しの思考ですぐ出てきた言葉をだす。

アレックス
「ＧＬＩＤＥ（グライド）！」

その瞬間、両手を広げる事によって滑空状態になり、より長時間滞空することが出来る技だ。

アレックス
「危ねえ～　？　？　？　これでもまだましだな。だけど空を飛ぶ為の能力が使えなかったら間違いなく危険だったな　？　？　？」

安心感に浸っていると、またスピード上がっていき斜め下に落ちていく。この技は『飛翔』ではなく『滑空』のため、永遠に飛ぶことは出来ない。

だいぶ離れた所に落とされたらしく、いくつかの町や村が森の奥にチラチラ見えたが、どれがマグノリアなのか分からなかった。
けれど、自分が貰った能力の確認をしたいため、近場の森の湖の近くに降りる事にした。

湖に向かいながら、アレックスは［自然落下→エアダッシュ→グライド→自然落下→エアダッシュ→グライド→自然落下］をやること

で、
地上から約４０ｍ上空から地面に飛び降りた。この位の高さなら平気らしい。そして、アレックスは目の前の湖を覗いてみるとその姿は　？　？　？　？　？

アレックス
「完璧にアレックス　？　マーサーだな　？　？　？　？　？　？　？
少し幼い感じだけど。」

その姿は、『Ｐｒｏｔｏｔｙｐｅ』にでてくる、アレックス・マーサーだった。しかし、なぜ自分が幼くなっているのだろうと思っていたらさきに、神様から貰った携帯電話の着信音が鳴った。
確認しようとポケットに手を入れながら近くの切り株に座ると、新着メールが2件届いていたので先に古い方を読んでみると　？　？
？　？　？　？

アレックス
「はぁっ？」

～～内容～～

これを見てるって事は～空からのダイブは～無事に着いたって事だなね～。
あとね～落とす場所と～時間がずれちゃってね～今原作よりも7年前になったんだ～。ごめんね～。
それと～能力の確認したら～色々と移せてないのが～あったらしい

から～詳しい事はメールが届くのを～待っててね～

ｂｙ神様より

アレックス

「？　？　？　？　？　？　？　？」

「神様はおっちょこちょいｗｗｗ」ポチポチポチポチ

「よしっ、保存完了！」

そんな感じで１つ目のメールは受け流し、もう１つのメールにはさっきよりも解りやすく書かれていたが、内容が酷かった。

アレックス

「ｏｈ　？　？　？　？　？　？　？」

～～内容～～

こんにちは、神様のサポートをする秘書です。単刀直入に言うと、最初に叶えた能力の一部が不具合により使用できません。

～以下の能力が完全に使用できません～

？　ベクトル操作による、自動反射能力

？　ベクトル操作による、自分の身体能力の向上

～以下の能力は条件付きで使用できます～

？　黒い羽の使用　※　使用回数は１日５回が限度。使用時

間は１０分。鍛えれば伸びますが時間と経験、感覚が必要。
？　ベクトル操作での反射能力　　※　自動では無いが反射はできる。

～以下の能力は支障が無く使用ができます～
？　演算能力
？　運動量・熱量・光・電気量ｅｔｃといった全てのベクトルを、触れただけで観測、変換する能力。
？　ベクトルの操作で周囲の感知能力
？　ベクトルの操作で風を操り暴風操作
？　逆算能力

これらが、貴方に渡した能力におきた不具合と使える能力です。こちらも謝罪といった形で、何かしたかったので５個目の内容を勝手ながら変えました。

『丈夫な身体』→『とある魔術の禁書目録にでてくる、聖人と同じ身体』

それと、特殊アイテムは１ヶ月おきに補充されますが、２０個以上にはならないようにしてあります。使い方に気をつけて下さい。では、よい第２の人生を楽しんで下さい。
秘書より

ＰＳ　この文章は見終わると自動的に破壊されます。

俺は最後の文章を見て、慌てて携帯電話を投げ捨てる。

それと同時に、音を立てて携帯電話は原型をとどめることなく、壊れていき最後は潰れて無くなった。

アレックス
「『Ｐｒｏｔｏｔｙｐｅ』の能力は大丈夫かな？さっきＧＬＩＤＥ（グライド）はできたけど　？　？　？　？　？　？　」

俺はそこで思考切り替えて、能力確認をする事にした。もし何かの手違いで『Ｐｒｏｔｏｔｙｐｅ』の能力がアップグレードしないとだめならば、完全に死ぬ。というかやばい。
俺は焦りながらも近くの木に向かって技をだした。

アレックス
「ＧＲＯＵＮＤＳＰＩＫＥ（グランドスパイク）！」ドンッ！ズガガガガッ！バシュッ！ザクザクザクザク！
「ジャンプしてからのＢＬＡＤＥ（ブレード）　ＡＩＲ（エア）　ＳＬＩＣＥ（スライス）　！」ダンッ！ヒュン！ゴォォォォォッ！ザンッ！

アレックスの出した技は地面に腕を突き刺し、離れた地面から棘を噴出させてダメージを与える。　また、上方向に突き上げる力が強く、対象相手の姿勢を大きく乱すことが可能な能力だ。
２発目に出した技は、空中でブレードを大きく振りかぶり、地面に向かって叩きつける。　下方向への追尾性能はかなり高い。

そのため、目の前に有った木は地面から出た棘によってボロボロの穴だらけになり縦に割れた。

アレックス
「アップグレードしないとできない技ができたってことは、後の能力は心配無いな。」グゥ～～～
「？　？　？　？　腹が減って来たから何か食べ物でも探してこよう」
？？？
「グルルルルルルルルルルル」（怒）
？？？
「ハァハァハァハァハァハァ／／／」
？？？
「グノレノレノレノレノレノレノレｗｗｗｗｗｗ」（笑）

アレックスがそんなことを考えていると、不意に後ろの木から怖そうな3匹のライオンの様な動物がいた。
あとの2匹は別の意味で怖い。
どうやらさっきの、デモンストレーションに驚いて興奮してるみたいだ。
勿論あとの2匹は知らない。むしろ知りたく無い。

アレックス
「？　？　？　？　背に腹は変えられないから、とりあえず倒して食べるのはゆっくり考えよう。」グゥ～～～

そして、俺はARMOREDFORM（アーマードフォルム）になりBLADES（ブレイズ）を両腕に装備して、忘れられてた武装色の覇気を身に纏（まと）う感じで装着し『暴

力』と言う名の『狩り』を始める。
勿論、決めゼリフは　？　？　？　？　？

アレックス
「さァ、スクラップの時間だ！」

～ＳｉｄｅＯｕｔ　アレックス

第０００．１話　その後（後書き）

いかがでしたか？
今回は戦闘シーンが有りませんでしたが、技を出す時の擬音が微妙でした。（＾＿＾；）

そろそろクリスマスの時期ですが、風邪を引かないようにして下さい。（＞人＜）

それでは、皆さんまた次回！

ｂｙ天翔る堕天使より。

第０００．２話　ギルドへの勧誘（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。
なんと初の連続投稿！

勢いに乗ってると楽しいです。
ヾ（@⌒ー⌒@）ノ

では、どうぞ！

第000.2話　ギルドへの勧誘

俺がフェアリーテイルの世界に来てから2年がたった。現在は原作開始5年前となる。つまりナツがルーシィに会うまでが少しずつ近づいて来た。

ちなみに俺はライオン（?）の様な動物を捕食した後、湖の近くにあった荒れた町の中にログハウスを造って生活をしている。
大きさは1階建ての1LDKのバス、トイレ付きだ。
なんと、ここら辺の町はあの変な動物達が暴れて被害に有っていたらしい。しかもあの変な2匹がボスという始末だった。

アレックス
「だいぶ時間がたったなぁ　?　?　?　?　?　能力も十分に使えるようになったしこの町も平和になったな　?　?　?　?　?　んっ?」

俺はこの2年間で、町から半径4~5kmに生息していた危険な猛獣+別の意味で危険な猛獣を追っ払った。
建物は一部が破損している所も有ったが、町の人達に『猛獣を追っ払った』と話したら皆、泣いて喜んだ。

そして話が飛ぶが、覇王色の覇気は半径200mまでなら威圧ができるようになったが、まだまだ伸びそうだ。見聞色の覇気と武装色の覇気は最初から完璧に使えて、見聞色の覇気での『気配の感知』が2?まで観(み)えるようになった。
それに、ベクトル操作の感知能力を合わせると3?まで伸びるよう

になり、かなり鮮明に観(みえるようになった。
そして今、その感知能力(センサー)には見覚えは無いが原作に出てたあのマスターと、紅い髪の女の子が俺の自宅に向かってやって来た。

アレックス
「やっと来たか　？　？　？　？　待ちわびたよ。」

距離にして２００ｍをきったところだ。ちょっとイタズラで、覇王色の覇気を軽く１回だけ当ててみる事にした。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　アレックス

～Ｓｉｄｅ　？？？
～覇気を当てられる少し前～

？？？　？　？　？　１
「この町にいるんですか、マスター？」ワクワク！！
？？？　？　？　？　２
「あぁ、この先に建っているログハウスに住んでおるようじゃ　？
？　？　気になるのか、エルザ？」

最初にマスターが？　？　？　？　？　？　いやマスター　？　マカロフは一緒に来たエルザという紅い髪の子と道案内をされながら少し話しをしていた。

エルザ
「はい！なんといってもこの辺りの危険生物を、１人で全部倒したり山に返したりしたと聞きました。
かなりの腕の立つ人物に違い有りません！」ワクワク！！
マカロフ
「うむ。確かにこの辺りの危険生物はそれこそ『Ｓランク』の依頼ほど危険では無いんじゃが『Ａランク』の依頼にしては、ちと荷が重いからの～。
しかも、この辺りの危険生物をたった１人でとなるとかなりの魔導士じゃろう　？　？　？　？　？　一体どんな奴なんじゃい？」

マカロフは、道案内をしてくれている男性に聞いてみた。

男性
「最初、僕達はかなり変わった人だと思いましたよ。５年前にこの町にあの変な猛獣を１人で倒しただなんて誰も信じないから、僕を含めた皆が口を揃えて言いましたよ、『じゃあこの辺りの危険生物を全部退治してくれ！！』ってね。
そしたら、ものの５日で退治したんだからびっくりしましたよ。
ましてや急に、『俺は魔法が使えないから建物が直せません。だから皆（みんな）で町を直しましょう。』だなんて言い出したんでよ。」
マカロフ＆エルザ

「「魔法が使えない？」」
男性
「はい。皆(みんな)が『どうやって倒したの？』って聞いたらあの人は、『威圧した』って言うから皆(みんな)びっくりしましたよ。
あっ、この道の突き当たりがアレックスさんの自宅です。」

そう言うと、男性が指を差した少し狭い1本道の先にまだ新しい感じの家があった。

男性
「では、自分はここで」ペコリ
マカロフ
「あぁ。有りがと」スッ
エルザ
「有難うございました。」ペコリ
マカロフ&エルザ
「「？？？？？？」」
エルザ
「マスター、魔法を使わずに『威圧』で倒したと聞くと何故か怖く感じるのですが。」
マカロフ
「うむ。どうやら気を引き締めて行こうかの。」

そういって2人はアレックスの自宅に近づいた瞬間、先程の男性が言ったアレックスの『威圧』が2人に当たった。

マカロフ&エルザ
「「ッーーーー！」」
エルザ
「マスター今のは？一体どこから？」
マカロフ
「落ち着くんじゃエルザ。多分だろうがこれが先程の男性が言っていた『威圧』じゃろう。」「とりあえず目当ての人物に会うに、行こうではないか。アレックス君にの。」スタスタ
エルザ
「はい。」スタスタ

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　マカロフ&エルザ

～Ｓｉｄｅ　アレックス

アレックス
「だいぶ焦ってるけど、マカロフさんはどうって事なさそうだな。多分、勧誘だろうから行く支度でもするか　？　？　？　？　？　と言っても何も無いけどね。」

アレックスの自宅には娯楽の類(たぐい)が一切無いため、俗(ぞく)にいう『殺風景な家』ともいえる。
しばらくすると家のドアが開き、1人の老人『マスター　？　マカロフ』と紅い髪の毛をした、『エルザ　？　スカーレット』が入っ

て来た。

マカロフ
「初めまして、わしはフェアリーテイルのマスターをしている、マカロフじゃ。そしてこっちがエルザじゃ。」ペコリ
エルザ
「宜しく。」ペコリ
アレックス
「こちらこそ宜しくお願いします。マスター　？　マカロフそれにエルザさん。」スッ
（まさかここでエルザにも合うなんて思わなかったな。）
「申し遅れましたが、俺の名前はアレックス　？　マーサー。アレックスと呼んでください」
マカロフ
「アレックスか　？　？　？　おぬしはここで何をしてるんじゃ？」
アレックス
「普通に生活してます　？　？　？　？　最近は猛獣も出て来なくなり平和になりましたから。」
マカロフ
「ふむ　？　？　？　？　？　？　ここには獰猛なA級の怪物ばかりが住み着く森なんじゃったんだが　？　？　？　？　ここ最近でこの森に生息していた危険な猛獣がいなくなったんじゃ。」
「それで気になって来たんじゃが　？　？　？　？　？　？　お主の仕業かの？」
アレックス
「流石ですねマスター　？　マカロフ、確かに俺が退治しました。勿論聞いたと思いますが『魔法は使ってない』と言うのは事実です。」

と言うと、マカロフとエルザが驚く

マカロフ
「ふむ　？　？　？　実力も申し分ない　？　？　？　なら大丈夫かの　？　？　？　？　どうかの？」
エルザ
「私も賛成です、マスター。」
アレックス
「　？　？　？　？　？　？」
マカロフ
「おぬし、わしのギルドに入らんかの？」

俺はこれを待っていたと言っていいほど、嬉しい申し出だ。

アレックス
「喜んで。」ニコッ

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　アレックス

第０００．２話　ギルドへの勧誘（後書き）

いかがでしたか？
登場人物の口調に、違和感があればぜひコメント下さい。

では、また次回！
ｂｙ天翔る堕天使より。

ＰＳ～アレックスはハーレムは基本的にはありません。一途な男なので　？　？　？　？　？　１２月２１日までに『活動報告』へ詳しく書きます。

第０００．３話　旅立ち～フェアリーテイルへ（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。
今回はアレックスが、ギルドに入ってナツと力比べをする話です。
なんと、活動報告についにコメントが書き込まれました。ゞ（@ー（@）ノ
ありがとうございました。
それでは、どうぞ！

第０００．３話　旅立ち～フェアリーテイルへ

～Ｓｉｄｅ　アレックス

アレックス
「じゃあ町の方はよろしくお願いします。もしまた猛獣が出たら、直ぐに駆けつけますから。」
「町の管理や治安も、頼みましたよ皆さん。」

アレックスは町の人達にこの町からでて『マグノリア』にあるギルドに入る事を町の長に伝え、町の人達にも話した。
勿論誰も止めなかった。何せ彼はこの町の恩人でもあったのでここで、自由にさせてあげようという話しが前から出ていたのだ。

アレックス
「皆さん、行ってきます。」

こうしてアレックスは、マカロフとエルザが待っている駅に向かって行った。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　アレックス

～Ｓｉｄｅ　マカロフ＆エルザ

マカロフ
「それにしても、あの青年はちと気になるの～。エルザ、お主はどうじゃ？」
エルザ
「マスターもですか？実は私もなんです。何故かあの男からは『魔力』ではない『別の力』が強く感じられます。」

マカロフとエルザは駅のホームにアレックスが来るまでの暇潰しに、２人はアレックスについて話していた。

マカロフ
「うむ、ワシも彼の『力』が見たことがないから、どれ程の強さか知りたいの。」
エルザ
「・・・マスターも知らない『力』となると・・・・一体なんでしょう・・・・あっ、来ましたよ。」

そんな話をしていると、人混みの中ならアレックスが見えた。その後３人は列車に乗り、『マグノリア』へと向かっている。
勿論、さっきの２人が話していた内容は全部アレックスの耳に聞こえていたのは言うまでもない。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　マカロフ＆エルザ

～Ｓｉｄｅ　ギルド内

マカロフ達が駅からおりて『マグノリア』にあるギルド、フェアリーテイルに向かっていとギルド内では・・・・・・・・

???・・・1

「オィ、クソ炎やんのか、あぁん？」ゴゴゴゴゴ！！！

???・・・2

「上等じゃねぇか、氷野郎。かかって来い　！　！」ゴゴゴゴッ！！！

???・・・3

「なんだぁ？またグレイとナツが喧嘩してんのか・・・・

いつもなら、エルザが止めにはいるのに見当たらねぇな。リサーナ、知らないか？」

リサーナ

「確か、今朝からマスターと一緒に『山のふもとにある町に用がある』っていってたよミラ姉。」

ハッピー

「あいっ！！」

最初に喧嘩をしていた2人は言うまでも無く、『グレイ・フルバスター』と『ナツ・ドラグニル』、相変わらず中の悪い2人組だ。

つぎに『ミラジェーン』、エルザを気にしている・・・・

ミラ
「なぁ～んだ。てっきりどっかに隠れてるかと思ったぜ。あっはっはっはっ！」（笑）

・・・・・そうでもなかった。彼女はエルザと仲が悪く、まさに『犬猿の仲』ともいえる程の、仲の悪さだった。

リサーナ
「もう、ミラ姉ったら。
あっ、ちょうど帰って来たよ。マスター、エルザおかえり～。あれ？マスター、後ろの人って誰？」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　ギルド内

～Ｓｉｄｅ　アレックス

アレックス
「ここがギルドですか、なかなかいい所ですねマスター・マカロフ。」
マカロフ
「そうかい？ありがとな。それと呼び方は何でもいいんじゃが、そ

の呼び方じゃと何か、よそよそしい感じが・・・・・」
アレックス
「申し訳ない、では『マスター』でいいですか？」
マカロフ
「うむ、お主はこれからワシらの家族じゃから好きに呼ぶがよい。」
リサーナ
「マスター、エルザ～おかえり～。あれ？マスター、後ろの人って誰？」

誰かがこちらに気がついたようだ。

アレックス
「こんにちは、お嬢さん。今日からこのギルドに入る事になった、アレックス・マーサーだ。
『アレックス』と呼んでくれ。」
（この子がリサーナかな。まだエドラスには飛ばされてなかったんだな。）
リサーナ
「こんにちは、アレックスさん。」
ミラ
「宜しくな、アレックス。」

簡単に挨拶をしていると、マカロフの横にいたエルザに気がついたある2人は、さっきまで喧嘩をしていたのにビクビクしながら、肩を組んでエルザと話している。

グレイ
「よ、よぉエルザ。き、今日も俺達は仲良しだぜぇ。な、なぁ。」
ガクガク
ナツ
「あ、あぃ」ガタガタ
エルザ
「うむ、仲良しはいい事だか時には喧嘩して互いの悪い所を見つけるのもいいぞ。」
ナツ&グレイ
「「お、俺達はそんな事（しないぜ。）（するわけねぇだろ。）」」
（苦笑）×2

エルザとの話が終わると、エルザは奥の部屋に向かって行く。それを確認した2人は、安心してその場にしゃがみ込んだ。
しばらくして、ナツが俺に気づいたらしく『お前誰だ？』、と言っている感じがした。
よく見ると、周りの人が俺に注目している。

マカロフ
「彼はワシらが用のあった町にいた、腕のあるフリーの魔導士じゃ。名前は『アレックス・マーサー』。」

そう言うと、ナツは目を輝かせたりグレイは興味を持ったり、ミラに至っては闘志をむき出しにしていた。マカロフは続けて、

マカロフ

「近頃、少し離れた町に現れる猛獣を1人で倒したらしいからの。皆も最近ギルドでの依頼で、この辺りの猛獣の討伐が少なくなったじゃろう？」

「それは、ここにいる彼のおかげなのじゃよ。」

一同

「「「「「「「「「えぇぇぇぇぇぇっ？」」」」」」」」」

ナツ

「そうなのかじっちゃん！よし、お前。俺と勝負しろっ！」

そういう事を言うと、ナツは笑顔で右の拳を俺に向けて言ってきた。勿論右手には、炎を纏っている状態だ。

こいつはかなりのバトルジャンキーらしい。というかマカロフ、余分なとこは言うな。

アレックス

「少しは落ち着け。俺とお前は、初対面(しょたいめん)だろ？そんな人に勝負を挑むのはどうかと思うのだが？」

俺は持てる限りの常識をナツにぶつけて理解してもらいたかったのだが、

ナツ

「いいじゃねぇか、ちょっとくらい。早く外に行こうぜ！！」

どうやら無駄らしくナツに引っ張られながら表にでた。マカロフも小声で、

マカロフ
「一回でいいんじゃ。軽くでいいから、やってくれんかのぅ？」ボソボソ

マカロフが苦虫を潰した顔をしていると、周りからは「マスターが認めるほど強いらしいぞ。」とか「どれ程の実力を持っているんだ？」と、ギャラリーまで増える始末。
・・・・つまり、『闘わないとマズイ状況』という事らしい。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　ギルド内

～Ｓｉｄｅ　アレックス

マカロフ
「それでは2人共、準備はよいかの？」
ナツ
「早く始めようぜ！！」

審判はマカロフがやるらしい。俺が「手加減してやる。」ってのをナツに持ち掛けたら、「いらねぇよそんなもん。」と言われた。

そして、目の前では目をキラキラと輝かせたナツがいる。・・・・・
なんでこんなにうれしそにできるんだ？
周りはギルドのメンバーに囲まれているので直ぐに降参出来ない。

アレックス
「しかたない・・・・」

そんな事をぼやいてから、俺は観念して能力を使う事にした。直ぐに『覇王色の覇気』で相手を『威圧』してもいいが、それだと芸が無いからやめておこう。

アレックス
「マスター」ボソッ

審判のマカロフへナツに聞こえない程の小声で話かける。

マカロフ
「ん？　なんじゃ？」ボソッ
アレックス
「ナツにはどの程の力で相手をすればいいでしょう。」ボソボソ
マカロフ
「ふ～む、適当にやればいいのではないか？こぅ、軽いトレーニング的な感じかのぅ？
あ、殺すのは勿論の事じゃが、なしじゃぞ」ボソボソ

まともな情報は得られなかった。というよりさっきまで家族って言ってたのに、その家族に対して殺し以外はオッケーなのか？と、俺が驚愕していると、

ナツ
「はやくしろよっ！」

対戦相手であるナツが、苛立っているのがわかる位の声を出してきた。

アレックス
「分かったからちょっと黙ってろ。」

俺はMUSCLEMASS（マッスルマス）を装備した。
ちなみにこの能力は、素手状態の攻撃ダメージを強化。戦闘中に発揮できる機動性能は全能力中随一。

マカロフ
「うんっ？それがお主の能力かの？」
アレックス
「ええ。相手が相手なので、ある程度本気を出さないと色々面倒でしょう。」

俺は苦笑して答えるが、

アレックス
「でも本当は、手加減するのが苦手なんですよ。」クスクス
マカロフ
「・・・・・。」

俺の言葉に黙るマカロフ。そのマカロフを尻目に、俺は戦闘体制にはいりナツに話しかける。

アレックス
「ナツ、と言ったな？先に謝っておこう。」
ナツ
「ん？何をだ？」

声をかける俺。ナツは思案顔で首を捻っている。でもこれは先に言っておかなくてはならない。

アレックス
「手加減は、なるべくする。だから・・・・・死ぬなよ？」

その瞬間、俺はＡＲＭＯＲＥＤＦＯＲＭ（アーマードフォルム）を装着した。周りから驚嘆の声がする。ナツも驚いてるようだが、俺は気にせずナツに話す。

アレックス
「さぁ、始めようか？」

準備は万端。俺が両腕を広げながら話かけると、ナツも俺の声で我にかえったのか構えなおす。

マカロフ
「始めっ！！」

マカロフの合図とともに、ナツは大きく息を吸い込んでいる。この技は、確か広範囲にいる敵に対して攻撃するはずだ。
ナツは周りに関係無く技を出すらしい。

ナツ
「火竜ゥの咆哮ォォ！！」

避けることもできるが、避けたら後ろにいる皆に当る。俺はしょうがなく手を前に突き出して、

マカロフ
「っ！？アレックスッ！！」

ナツの炎が直撃した。マカロフの慌てた声が聞こえるが、俺は『武装色の覇気』で身体の表面を覆っているから少し温かい位だ。確かに、普通に見たら自殺行為だ。
ナツの技の衝撃で、俺の周りに砂塵が巻き上がった。

ナツ
「よし、俺の勝ちだっ！」ブイ！

ナツは勝ちを確信しているようだ。周りからも「なんだ、弱いじゃないねぇか。」との声が聞こえる。

アレックス
「俺も随分なめられたもんだな・・・・・」
ナツ
「なっ！？」

俺がつぶやくと同時に、砂埃が晴れていく。そこには無傷でいる俺がいる。

アレックス
「解析終了・・・ナツ、お前の炎はもう効かない。いや、俺にはもう意味が無い。」

そして俺は先程よりも強く拳を握りながら、

アレックス
「じゃあ・・・・、次はこっちの番だ・・・なっ！！」

そう言ったと同時に、ナツの懐に飛び込む。もう反撃の隙は与えない。

ナツ
「っ！？」

ナツがそれに気づき、身構えるがもう遅かった。

ナツ
「うわっ！？」

俺はナツの足払い、身体を宙に浮かせた。そしてナツの左肩を押さえて地面に仰向けにする。

ドゴンッ！

こぶしを叩き付けた。先程よりも多い砂埃が宙に舞い上がる。

エルザ

「ナツっ！」
アレックス
「大丈夫だ、死んでない。」
エルザ
「なにっ！？」

エルザに声をかける。そんな怒らないでほしいかった。
普通なら、ただではすまない音だった。しかし、それは『ナツにあたっている』時の話だ。

アレックス
「ちゃんと外しておいたからだよ。」

その言葉と共に砂埃がはれ、

ナツ
「キュ～」

驚いて気を失ってるナツの姿が現れた。それも、

一同
「「「「「「「「「っ！？」」」」」」」」」

亀裂の入った地面と共に、３つの穴が見えたからだ・・・・

マカロフ
「そこまでっ！　勝者、アレックス！」

そこに、マカロフの試合終了の合図がかかる。

アレックス
「んっ？」

勝負が終わったのに静かだ。辺りを見渡すと、皆口を空けてこっちをみている。
まさかとは思うが、やりすぎたかな？
俺がそう思っていると、急に周りから、

一同
「「「「「「「「「「うおぉーーーーーーーーっ！！！！！」」」」」」」」」」
アレックス
「っ！？」

皆の叫びが響き渡った。

第０００．３話　旅立ち～フェアリーテイルへ（後書き）

いかがでしょうか？
今回はここで終わりましたが、次回はグレイ達がアレックスと勝負をします。

～活動報告内容の途中結果～
ミラジェーン・・・・２票＋１票

第０００．４話　礼儀知らずに容赦なし（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。
今回は、色々な意味で大変でした。

この話から、キャラクターの視点を書き始めましたが、キャラクターの口調がなかなかうまくいきません。
ご意見の方、気軽に書き込んで下さい。

では、どうぞ！

第０００．４話　礼儀知らずに容赦なし

～Ｓｉｄｅ　アレックス

ギルド内では、先程のナツとの戦いでかなり興奮している４人＋１人がさっきから俺に、『（もう１回）（俺と）（私と）戦え！』と言ってきた。

ちなみに、その人物は先程負けた
炎の滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）『ナツ』、
氷の造形魔導士（こおりぞうけいまどうし）『グレイ』、
雷の滅竜魔導士（かみなりドラゴンスレイヤー）『ラクサス』、
騎士（ザ・ナイト）を使う『エルザ』、
吸収（テイクオーバー）・サタンソウルを使う『ミラ』だ。

アレックス
「条件付きで良いなら相手をする。良いか？」
ナツ
「おう！早く言え！」
グレイ
「ナツ、お前は負けたんだから諦めろ。」
ラクサス
「ガキ共の相手はしないで、俺と戦え！！」
エルザ
「少しで良いから手合わせを頼む。」
ミラ
「アレックス早くしろ。」

俺はひとまず、こいつ等に『礼儀』をいち早く叩き込みたい。何処の世界に年上に対してタメ口で話す奴がいるんだ。
エルザを見習って欲しいもんだな。個人的にはミラがタイプなんだが・・・・・

アレックス
「まず最初に・・・・ナツ、お前はさっき負けたばかりだから諦めろ。
次に裸の君、せめてズボンを履け。パンツだけはさすがにマズイ。
それとヘッドホンの君、お前もまだ『ガキ』の部類だ。調子に乗るなよ？
エルザ、1人を相手にしたら休憩させてくれ。それでもいいなら相手をする。
最後にミラ、一応俺は年上だ。せめて敬語で頼め。それに女の子なんだから、その言葉使いはやめなさい。」

俺は言いたかった事を、全て言った。全員の名前は知っていたがあえて言わない。なんでかって？こいつ等には、一から『礼儀』を叩き込みたいからだよ。
そんな事を言ってると、皆が口々に喋り出した。

ナツ
「次は勝つ！だから勝負だ！」ニッ！
グレイ
「だあーっ！しまった！」バタバタ
ラクサス

「ふざけんじゃねぇぞ！」バチバチバチッ
エルザ
「ありがとう、アレックス。」ニコッ
ミラ
「わ、わかった。次からは気をつける。」オドオド
アレックス
「よろしい。ナツとヘッドホンの君は・・・・・ちょっと黙ってろ。」ギンッ！

俺は、覇王色の覇気をナツとラクサスに気絶させる程度に当てた。ナツはすぐに倒れたが、ラクサスは少し耐えた様だ。だが、こちらも倒れた。

アレックス
「これで礼儀知らずとうるさい奴はいなくなったな・・・・んっ？どうした。」

それを見ていた3人は若干・・・いや、かなり驚いている。周りにいた人達も「何をしたんだ。」や「ラクサスは負けたのか？」と言っている。
そんな中、1人の人物が口を開いた。

マカロフ
「それはワシ等にしたのや、猛獣を倒したのと同じ『威圧(いあつ)』なのか、アレックス？」
アレックス

「・・・・はい、しかしマスター達にしたのは1割だとすると、2人を気絶させたり猛獣にしたのは2割程の威圧ですので、ご心配なく。」ニコッ

「さあ、話はとぶが俺は暇だが、時間が無い。誰から始めるか決めてくれ。決めてないなら上着を着てない君から始めよう。

グレイ

「お、おぅ。よろしく頼むぜ。」

そして俺らは、ナツとラクサスを残して、表へと向かう。

勝負の順番は、

1. グレイ・フルバスター
2. エルザ・スカーレット
3. ミラジェーン・ストラウス

～Side Out アレックス

～Side 3人

グレイ

（ラクサスが一瞬でやられちまった・・・・勝てるのかな？）

エルザ

（なんだかミラの顔が赤くなってるな・・・・まさかな。それよりもどうやって、アレックスを倒すかだな。）

ミラ
（何をしやがったんだこいつは？急にナツとラクサスを気絶させやがった。しかも、“礼儀が知らないから”って理由でだと？）
（だいぶ本気でかからないとまずいな・・・・あれっ？そういえば、アレックスと始めて会った時ってタメ口だったよな・・・・なんで怒らなかったんだ？）
（それに、久し振りに“女の子なんだから”、だなんて言われた／／／）

それぞれが色々な事を考えている。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　３人

～Ｓｉｄｅ　アレックス

アレックス
「準備はいいか、グレイ。時間が欲しいなら幾らでもやるぞ。まぁ、あげるつもりは無いけどな。」
グレイ
「じゃあ聞くなよ！期待しちまったじゃねぇか！」

そんな事をしていると、マカロフが審判をやりだした。何だかんだいって、俺もマカロフも割と楽しんでいる。
そしていつもの事だが、ギルド内にいたほぼ全員がギャラリーと

して集まってきた。

マカロフ
「それでは、始め！」
グレイ
「氷造形（アイスメイク）・・槍騎兵（ランス）！氷造形（アイスメイク）・・大槌兵（ハンマー）！」

マカロフの合図と共に、グレイは槍騎兵（ランス）と大槌兵（ハンマー）を繰り出した。おそらくだが、槍騎兵（ランス）でその場に足止めさせているうちに、大槌兵（ハンマー）で俺にとどめを刺すつもりだろう。
しかし、実際には自分の得意な技をアレックスに1回でもいいから当てたいだけらしい。

アレックス
「氷の槍とハンマーか・・・・組み合わせは素晴らしい・・・だが、まあまあだな。」
グレイ
「なにっ？」
アレックス
「ＢＬＡＤＥＳ（ブレイズ）＆ＳＨＩＥＬＤ（シールド）！」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　アレックス

～Ｓｉｄｅ　グレイ

マカロフ
「それでは、始め！」
グレイ
「氷造形（アイスメイク）・・・槍騎兵（ランス）！氷造形（アイスメイク）・・大槌兵（ハンマー）！」

グレイは、この攻撃を最も得意としている。槍騎兵（ランス）はかなりのスピードがある為、先制攻撃に向いている。大槌兵（ハンマー）に至っては、先程の槍騎兵（ランス）よりはスピードは劣るが、威力は申し分ない為追撃として出した。

グレイ
（決まった！）
アレックス
「だが、まあまあだな。」
グレイ
「なにっ？」
アレックス
「ＢＬＡＤＥＳ（ブレイズ）＆ＳＨＩＥＬＤ（シールド）！」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　グレイ

～Ｓｉｄｅ　アレックス

俺は右腕にＢＬＡＤＥＳ（ブレィズ）を装着し、右腕を後ろに向けて身体をグレイに対して、半身の状態にした。そしてＳＨＩＥＬＤ（シールド）を左腕に装着して構えた。最後に、武装色の覇気を忘れずに身に纏った。

最初の槍騎兵（ランス）をＳＨＩＥＬＤ（シールド）で簡単に防ぎ、真上からの大槌（ハンマー）兵をＢＬＡＤＥＳ（ブレィズ）で切った。

グレイ
「はぁっ？」
エルザ
「流石だな。」
ミラ
「強すぎだろ。」

そして俺は、グレイの真横まで移動して右腕のＢＬＡＤＥＳ（ブレィズ）を喉に突きつけた。

グレイ
「ッ！！！」
マカロフ
「そこまでっ！勝者アレックス！」
一同
「「「「「「「すげぇーーーーーー！」」」」」」」

マカロフが楽しそうにしているとギャラリーの大声で起きたのか、

ギルドの中で倒れていたラクサスが目を覚ました。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　アレックス

～Ｓｉｄｅ　３人

グレイ
（何にも見えなかった・・・・気づいたら横にいて、喉に突きつけられてた。）
エルザ
（やはり強いな。今回は諦めて、ミラと変わってもらうとするか。）「ミラ、順番を変わってくれないか。私は辞退するから、頼む。」
ボソボソ
ミラ
「はぁっ？・・・・こ、今回だけだからな！／／／」ボソボソ
エルザ
「すまない、恩にきる。」ボソッ
（やはり顔が赤いな・・・・・もしかして・・・・な？）
ミラ
（ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！！何だか、ドキドキしてきた！！なんで！？落ち着け私、たかが勝負するだけだろ！？）
カァーッ

それぞれが特集な思いをしたりしている。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　３人

～Ｓｉｄｅ　アレックス

アレックス
「なかなか面白い技の組み合わせだったぞ、グレイ。だがやるなら槍騎兵（ランス）をもっと早く打ち出して敵を撹乱させてから、大槌兵（ハンマー）を相手から見えない位置から当てる事だ。」
「まあ弱い相手とか不意打ちなら、かなり強力なコンボだ。俺でもギリギリで反応できたから、危なかったよ。」
グレイ
「そ、そうなのか。（あの動きは絶対に、強い奴の動きだった。一つ一つに無駄がなかったからな。）」
アレックス
「ああ、後は攻撃後の動きに気をつけろ。どんなに強い技で『結果』が良くても、技を出すまでの『過程』も大事だからな。」

俺はグレイに簡単なアドバイスをしていると、エルザが俺に近づいて“今回は辞めておく”と言った。つまり次に勝負するのはミラだ。
・・・・・なんだか物凄く顔が赤いが、気のせいだろうか。

アレックス
「ミラ、始められるか？それともお前も、エルザみたいに辞めておくか？顔がだいぶ赤いが。」
ミラ
「だっ、大丈夫だっ！／／／」
マカロフ
「ふっ。・・・では両者準備は良いかの？」
アレックス＆ミラ
「「ああ、いいぞ」」
マカロフ
「それでは、始め！」

マカロフの合図と共に、俺は走りながらＭＵＳＣＬＥＭＡＳＳ（マッスルマス）を装着した。ミラも、サタンソウルになり両者の『殴り合い』が始まる。
『殴り合い』は始めてだから、見聞色の覇気を使ってミラの攻撃を『探知』し始めたら、ミラの後ろからさっきまで倒れていたラクサスが、雷竜奉天劇（らいりゅうほうてんげき）を繰り出した。
流石にマズイと思い、俺は一旦ミラの右拳を顔の左に受け流し、ミラを左手俺の懐に引き寄せる。そしてミラの後ろから来た攻撃に対して、右腕をＳＨＩＥＬＤ（シールド）にして反射を使った。
反射だけでも良かったが、反射だけで確実に返せるか分からなかったから、保険として出した。
一方通行（アクセラレータ）さんの反射能力、久しぶりに使ったような気がする。

アレックス
「解析終了・・・・・これで万が一でも安心だな。ミラ、大丈夫か？」

ミラ
「＼（／／∇／／）／」プシューッ
アレックス
「気絶してる・・・・のかこれは。なんだか幸せそうだが。」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　アレックス

～Ｓｉｄｅ　ミラ

マカロフ
「それでは、始め！」

私は闇雲に拳をアレックスに突きつけた筈だったが、アレックスはそれを簡単に避けて、私を抱き寄せた。

ミラ
（えっ？なに？アレックスに抱き締められてる？えっ？どうゆうこと？って言うか私アレックスの首に腕まわしてる？）
（うわっ？アレックスの息が首にっ？ヤバイヤバイヤバイッ？顔が？アレックスッ？力を込めるな？アレックスの胸に顔が？くぁｗｓｅｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ？）
（しあわせだー！！！＼（／／∇／／）／）プシュー

〜Side Out ミラ

第０００．４話　礼儀知らずに容赦なし（後書き）

いかがでしょう？

頑張って続きを書いていきたいですが、軽いスランプです。（´Д｀）ｙ┻・～～

でも、諦めません。

次回は、ラクサスへのお仕置き編です。

では、また会う日まで。

ｂｙ天翔る堕天使より。

第０００．５話　一方的な勝負（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。

何とか書けたけど、あまりの駄文にスランプ気味な俺（；´Д｀）

原作まで後少しなのでテンション上げて頑張ります。

♪――Ｏ（≧∇≦）Ｏ――♪

では、どうぞ！

第０００．５話　一方的な勝負

～Ｓｉｄｅ　アレックス

アレックス
「ヘッドホン君、これは一体全体どういうつもりなのかな？」ギロリッ！
ラクサス
「ーーッ？」ゾクッ！
マカロフ
「ーーッ？」ゾクッ！

俺は急に攻撃してきたラクサスに対して『その場から動くな！』の意味を込めた威圧をしてから、マカロフには『皆を近づけるな』の意味を込めた威圧をしたのは、この方が早く伝わるからだ。
２人は理解したか判らないが、ラクサスはその場から動かずにこっちを見ている。マカロフも察してくれたのか、俺に向かって１度頷き俺とラクサスから、皆を離れさせた。
そんな中、ある２人にマカロフが俺に指を差しながら話していると、２人が駆け足で向かってきた。エルフマンとリサーナだった。恐らくマカロフが頼んだのだろう。

エルフマン
「姉ちゃん！アレックスさん、姉ちゃんは大丈夫ですか！？」
リサーナ
「エルフ兄ちゃん、アレックスさんが守ってくれてたから大丈夫

だよ。」
アレックス
「ああ、大丈夫だ気絶してるだけなんだが・・・・やけに顔が赤いんだ。勝負の前からだったから、もしかしたら風邪なのかもしれない。看病は手伝うから、後は任せてもいいか？」
エルフマン
「はっ、はい！！」（凄く赤い！早く寝かさなきゃ！！）
リサーナ
「わかりました。」（気絶してる割になんだが顔がニヤついてるんだよな～。）
ミラ
「（／／∇／／）」プシュー

俺は気絶してるミラをエルフマンに任して、リサーナにはすっかり忘れていた『特殊アイテム』を1粒渡して、起きたら飲むように伝えた。
そして俺は怒りが爆発寸前だったが、今のを見て反省していれば少し能力を抑えてやろう。と、いった願いを思いながらラクサスにむかって、

アレックス
「さあヘッドホン君、愉快なオブジェになる準備はできてるかな？それともお前は、スクラップにされたいか？」ゴゴゴゴゴゴ！！

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　アレックス

～Ｓｉｄｅ　ラクサス

俺は確かに攻撃したはずだった。俺の技でもかなり強力な、雷竜奉天劇を繰り出してミラと一緒に倒してやったはずだ。
それなのにあいつは簡単に防いだだけでなくて、雷竜奉天劇を俺にそのまま返しやがった。

ラクサス
「どうゆう事だ。」
アレックス
「ヘッドホン君、これは一体全体どういうつもりなのかな？」ギロリッ！
ラクサス
「ーーッ？」ゾクッ！
マカロフ
「ーーッ？」ゾクッ！

あいつは今、何をしやがった？俺が勝負を挑んで気絶した時よりも、かなりヤバイ感じがしやがる。『少しでも動けば貴様の命が無いと思え。』とでも言ってるのか？
だが、俺は最強だ！さっきはきっと、まぐれに決まっているはずだ。そうに決まっている！俺に勝てる奴は、このギルドにはいないんだからな。

アレックス
「さあヘッドホン君、愉快なオブジェになる準備はできてるかな？それともお前は、スクラップにされたいか？」ゴゴゴゴゴゴ！！

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　ラクサス

～Ｓｉｄｅ　アレックス

アレックス
（マカロフが周りの人を遠ざけてくれて助かった・・・・・これで心置きなく能力が使える。）
「ヘッドホン君、自己紹介でもしようではないか。俺の名前は、『アレックス・マーサー』。好きに呼んでくれ。君の名前は？」
ラクサス
「黙ってろ、化物！自己紹介？そんなもん、どうだっていい！このギルドで最強の俺と戦え！」
アレックス
「・・・・成る程、『原型が留めなくなるまでこの俺を叩いてくれ。』だな、任せておけラクサス。それと俺の異名は『化物（モンスター）』だから、褒め言葉ありがとう。」

俺はラクサスの言葉を自動変換、もしくは自己解釈をした俺は手加減する気はもう微塵も無い。
俺はＭＵＳＣＬＥＭＡＳＳ（マッスルマス）を装着して、武装色の覇気をＭＡＸま

で身に纏わせて構える。
ＡＲＭＯＲＥＤＦＯＲＭ（アーマードフォルム）も個人的に好きだから装着して、黒い羽も出すがこれは自分の腕に巻き付く感じで纏わせる。
こっちの世界に来て興味本位でやってみたら、時間は掛かったが上手くできた。時間としては３０分間使用ができる。回数は２０回程だが時々増減する。

アレックス
「実は俺も最凶（さいきょう）だから気が合うな。」ニヤリ
ラクサス
「これでも喰らっとけ！鳴り響くは招雷の轟き、天より落ちて灰燼と化せ！レイジングボルト！！」バリバリバリッ！

空中から巨大な雷が俺の頭上目掛けて降ってきた。しかし俺はそれを避けずに右拳で打ち消した。
実際は先程の攻撃で演算をしていたから、ラクサスの雷を空気中に小さく分散させているだけであり、そんな強く殴ってはいない。

アレックス
「それで？何故いきなりミラに攻撃したんだ。運が悪ければ死んでしまっていたかもしれないぞ。」
ラクサス
「うるせぇ！大体お前が俺の事を『ガキ』扱いしたからだろ！それにあいつは弱い！なら死んでもかまわん！ハァーーッ！」

そう言いながらラクサスは雷を纏って俺に突っ込んできた。そん

なラクサスを俺は右拳で鳩尾を殴った。

ラクサス
「がはっ！？」

突っ込んできたラクサスはその場で倒れそうになるが、俺は襟を掴んで無理矢理立たせる。苦しそうだが構わない。
そのまま俺はアッパーカットをラクサスにかましてからＳＰＩＫＥＤＲＩＶＥＲ（イクドライバー）をやった。これは両手を振りかぶって、対象を地面に叩き付ける技。アッパーカットの後に浮かんでいる敵にしか使えない。
そして地面に叩きつけて倒れているラクサスにＧＲＯＵＮＤＳＨＡＴＴＥＲ（ドサター）もかました。これは、地面を思いっきりブッ叩き、衝撃で対象を空に吹き飛ばす技。

アレックス
「これで、フィニッシュだ。ＦＬＹＩＮＧＫＩＣＫ（フライングキック）！＆ＦＬＩＰＫＩＣＫＬＡＵＮＣＨＥＲ（ランチャー）！」

ＦＬＹＩＮＧＫＩＣＫ（フライングキック）は、ジャンプしてから相手に右足で蹴る技。ＦＬＩＰＫＩＣＫＬＡＵＮＣＨＥＲ（フリップキックランチャー）はＦｌｙｉｎｇＫｉｃｋがヒットした瞬間、左足でも敵を蹴り上げることで、　追加ダメージを与え軽量の相手を吹き飛ばす。

ラクサス

「がはぁぁぁ！」ズザーーーッ！

ラクサスは、マカロフの近くまで蹴り飛ばされ気絶している。それをみたマカロフ、はラクサスに近づき頷いた。

マカロフ
「うむ。ここまで！勝者、アレックス！」

マスターが左手を挙げ勝利者宣言をすると同時に周りからは、

マカオ
「すげぇぞ！あのラクサスを一方的に倒しやがった！」
ワカバ
「嘘だろ！？あのラクサスが新人に負けたのかよ！？」
ナツ
「アレックス、もう1回俺と勝負しろー！」
マカオ＆ワカバ
「「やめとけナツ、あのラクサスでさえ負けたんだ。しかもお前は負けたばっかりだろ？」」
ナツ
「やってみなきゃわかんねーだろー！なぁ、ハッピー？」
ハッピー
「あいっ！」

周りが少しずつだが騒がしくなってきた。恐らくだが、これが普

段のフェアリーテイルだろう。だから仕方が無いんだろうな。そう思っていると、息を荒げながらゆっくり立ち上がるラクサス。

ラクサス
「はぁはぁ・・・・次、戦うときは必ず勝つ！はぁはぁ・・・覚えておけ！俺が最強だ！」ヨロヨロ
アレックス
「構わん。俺はいつでも挑戦を受ける。だが今はこれを噛み砕いて傷を治しとけ。直ぐに治るはずだ。」つ薬
ラクサス
「クソったれが！」パシッ！ガリッ！

薬のおかげか、立ちあがるのが大変そうなラクサスだったが、直ぐに立ち上がる事ができたラクサスは、ギルドの中へゆっくり入っていった。

アレックス
「ラクサス、この世界には死んでもいい奴なんていない。ミラもその1人だ。」
ラクサス
「ふんっ。お前は先生か。」

俺は肩を貸しながらラクサスを仮眠室へ運んで寝かせた。ミラは別の部屋で寝ているらしい。顔を出そうとしたが、俺は他のギルドメンバーに背中を押されながら、ギルドの方に言ってしまった。
エルフマンとリサーナがいたので話聞くと、どうやら俺の渡した

薬を飲んだらまた赤くなって寝たと言っていたが、熱は無かったみたいだ。この楽しい宴会が終わり次第、顔を出そうと思っている

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　アレックス

第０００．５話　一方的な勝負（後書き）

いかがでしょう？

次回はミラにお見舞いに行く話です。なかなか上手く出来ないので、時間は掛かります。

ではまた次回！

ｂｙ天翔る堕天使より。

第０００．６話　ミラの元へ行くと、アクシデント発生。（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。

今年のクリスマスは家族と過ごしました。

来年こそは・・・・と、考えていますがまず無理でしょう（，Д、）ｙ┻・~~

今回はかなり無理矢理感がありますので、暖かい目で見て下さい。

第０００．６話　ミラの元へ行くと、アクシデント発生。

～Ｓｉｄｅ　アレックス

～夜中～

俺は、皆が酒を飲みまくって酔い潰れている奴や、机に突っ伏している寝てる奴、床に寝ている奴を一カ所に集めて毛布をかけた。
一通りが終わった所でミラのいる病室へと向かった。ミラの病室は、ラクサスよりも奥の部屋だとリサーナから聞いておいた。
俺は部屋の扉を開けて中に入った。ミラは気がついたのか、少しだけ動いている。

アレックス
「ミラ、体は大丈夫か？」
ミラ
「ん～誰？エルフマン？それともリサーナ？」モゾモゾ
アレックス
「アレックスだ。少し良いか？」
ミラ
「ア、アレッーーッ！／／／」ガバッ
アレックス
「シーーッ。声が大きい。」

俺がミラの口に手を当てて大きな声をだすのを塞ぐと、窓からの

月の光でミラの顔が赤くなっているのが分かる。
俺は取り敢えずミラに落ち着くように説得したが、最初はなかなか落ち着いてくれず興奮していた。

アレックス
「体の具合はもう大丈夫か？もしまだ辛いようなら出直してくるが？」ナデナデ
ミラ
「だ、大丈夫だ！お前の薬を飲んだら直ぐに治ったぞ／／／あ、ありがとう／／／」カァァッ
アレックス
「そうか。お前が無事で良かった・・・・だいぶ顔が赤くなってるが本当に大丈夫なのか？」スッ、ピトッ

俺がミラの頭を撫でてると、ミラの顔が赤くなってきた。そこで俺は、両手でミラの顔を支えて俺のオデコにあてた。確かに熱は無いようだが少し熱い気がする。

アレックス
「今は無理しないでゆっくり寝ていろ。まだ治ってないようだからな・・・・大丈夫か？」
ミラ
「＼（／／∇／／）／」プシュー

俺は取り敢えず、赤くなってしまったミラをベットに戻しておいた。俺は不意に窓の外に目を向けると、そこには神様と綺麗な人が

浮かんでいる・・・・・なんで？
　神様は俺に向かって手招きをしていたのでギルドの入口から出て行き、神様の方へ向かった。

アレックス
「何であんたがココに居るんだよ。さっきのが人目についたら、流石にマズイんじゃないか？」
神様
「大丈夫だよ～。僕達の周りには～結界みたいな～特殊なものを～張り巡らしてるから～誰にも見えないよ～。」
秘書
「神様、今はそんな事よりもこの男に大事な用件が有るのではないのですか？」
アレックス
「大事な用件？一体なんですか神様？」

　俺は全く・・・・いや、恐らくだがまたこの神様（おっちょこちょい）が何かしたと考えた。何せ俺を『うっかり死なせちゃいました。』みたいな事を言ったから、また『うっかり～しちゃった』だろう。

神様
「じ、実は～僕もよく分らないから～後は秘書さんに～聞いといてね～。」ヒュンッ！
アレックス
「・・・・・逃げたな。まあ、当たり前か。それで？用件とは何ですか。」
秘書

「実は、カクカクシカジカ。」
アレックス
「まるまるうまうま・・・・・マジですか。」

簡単に説明をすると、神様は俺に渡した能力を紙に書いて机の上においていたら、３個目の能力を神様が消してしまったらしい・・・・・なんで？
一応神様も悪いと思ったらしく、『埋め合わせる為の能力』＋『新しく付け足す能力２個』でチャラにしよう。との事でした。

アレックス
「ならまた同じ能力を選べばいいのでは？」
秘書
「残念ながらそれはできません。他の転生者に試してみましたが、その能力本来の実力が１００％だとすると、１０％も発揮できませんでした。それでもよければ構いませんが？」
アレックス
「遠慮しておきます。」

どうやらマジでヤバイ。あの３個目の能力は『戦闘にはもってこい』程の力だったのでへこんでいる。だが俺は『『Ｐｒｏｔｏｔｙｐｅ』の、アレックス・マーサーの全能力ＭＡＸ状態』並に使える、能力を思い出した。

アレックス
「まず最初に消えた１個目の能力は、ワンピースに出てくるＣＰ

9が使用できる六式全てが使用可能。
」
秘書
「かしこまりました。では後の『新しい能力』の方をお願いします。」カキカキ
アレックス
「1個目は複数の悪魔の実が使用可能。動物(ゾオン)系悪魔の実「ネコネコの実　モデル”豹(レオパルド)”」動物(ゾオン)系悪魔の実「ウシウシの実　モデル”麒麟(ジラフ)”」動物(ゾオン)系悪魔の実「イヌイヌの実　モデル”狼(ウルフ)”」超人(パラミシアン)系悪魔の実「ドアドアの実」の能力で。
2個目は、魔法剣の使用が可能。ついでにエルザみたいに服も変えれると嬉しい。」
秘書
「分かりました。しかし悪魔の実の能力の使用中は一方通行(アクセラレーター)のベクトル操作能力は使用できません。それと、『豹(レオパルド)』と『麒麟(ジラフ)』と『狼(ウルフ)』の使用中は『ドアドア』は使用できません。」カキカキカキ
アレックス
「わかりました。」

俺の目の前にいる秘書さんは一通り書き終わったのか、こちらを見てきた。実に綺麗な人だ。例えるなら『大和撫子』＋『エロカッコイイ』みたいな感じ。
話は飛んで、また神様みたいに『ミスをしました。』何て有りませんように。

秘書
「能力は完璧に渡しておきましたので安心して下さい。それと見た目をワンピースに出てくる『カク』に変えておきました。あと、

この世界に『前の貴方』を知っている人物を『今の貴方』にインプットしておきました。」ニコッ
カク
「あ、ああ。すまないの。」
秘書
「詳しい事は次回の投稿で報告します。」
カク
「メタ発言は禁止じゃぞ。」

ワシがお礼を言い終わると同時に秘書さんは、ワシの前から消え去った。取り敢えずミラの元へ行き、ベットの横に椅子を置いて『形だけの看病』をしていた。

〜翌朝〜

ワシは目が覚めると、自分に毛布が掛けられていることに気が付いた。窓の外を見るとだいぶ日が上りはじめている。
ギルドの方は、だいふ騒がしくなっていたので顔を出そうと椅子から立ち上がると、扉が開いて2人が入って来た。

エルフマン
「あ、おはようございます、カクさん。朝まで姉ちゃんの看病をしてくれて有難うございます。」ペコリ
リサーナ
「カク、おはよ〜。ミラ姉の看病ありがとね。」ニコッ
カク
「あぁ、おはよう。ミラの具合はどうじゃ？」

リサーナ
「『もう大丈夫』ってミラ姉が言ってたよ。」

ワシは『そうか。』と言ってからエルフマンとリサーナを連れてギルドの方へと向かって行った。どうやら誰も俺が変わった事に気づいていないみたいだ。特に鼻が。
そこでワシは、喧嘩していたナツとグレイを止めたエルザが、今度はミラと喧嘩をし始めたのを見た。
エルザがこっちに気が付いてミラに内緒話をしていると、次第にミラの顔が赤くなっていった。そして、ミラが急に走り出したのを見ていた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　アレックス改めてカク

～Ｓｉｄｅ　エルザ

エルザ
「んっ？またナツとグレイが喧嘩をいているのか。懲りない奴らですね。」
マカロフ
「まったくじゃのぅ。エルザ、すまんがあの２人の喧嘩を止めてくれんか？依頼が終わったばかりで悪いんじゃが。」ポリポリ
エルザ
「わかりました。」スッ

ナツ
「おい、グレイ。邪魔なんだよどけ。」ギロッ
グレイ
「うるせぇな、おめぇがどけばイイだろうが、あぁ！？」ギロッ
ゴツンッ！ゴツンッ！
そんな2人の喧嘩をエルザは死角になっている所から殴りつけて無理矢理だが黙らせた。

ナツ&グレイ
「～～～ッ！」ジタバタジタバタ！
エルザ
「お前達はまた喧嘩をしていたな。どうしてそんなに仲が悪いんだ？」
グレイ
「な、何を言ってるんだ？お、俺達はいつでも仲良しだぜ？な、なぁ。」ガタガタ
ナツ
「も、もちろんだぜ。」プルプル

ナツとグレイとたわいも無い会話をしていると後ろからあいつの声が聞こえた。

ミラ
「よぉ、エルザ。朝から居ないもんだからてっきり隠れてるかと思っちまったぜ。」

エルザ
「ミラ、私はてっきりまだベットで寝込んで、カクに看病して貰って甘えてるかとおもったよ。」
ミラ
「な、な、な、／／／」カァァ！

私がミラにカクの事を話しながら茶化すと、今まで見た事がない位の驚きをし始めた。
そして私はリサーナとエルフマンが、カクを連れて来たのを見つけたのでミラに追い打ちをかけた。

エルザ
「ほら、後ろにいるカクが心配そうにお前を見ているぞ。」ボソッ
ミラ
「＼（／／∇／／）／」ダッシュ！

私がミラに内緒話をすると、顔を真っ赤にさせながら走って行った・・・・どうやらかなり照れてるようだ。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　エルザ

～Ｓｉｄｅ　カク

カク
「ミラはどうしたんじゃ？あんなに慌てて何か用事でも有るのか？」
エルフマン
「いえ、今日は日曜日なので予定は無いはずです・・・・リサーナ、何か聞いてる？」
リサーナ
「私も聞いてないよ。」

ワシはさっまで話していたエルザに話を聞くと、『さあ？』と言われた。その後、ワシがミラに会う度にミラは顔を赤くしている。

第０００．６話　ミラの元へ行くと、アクシデント発生。（後書き）

途中で予告があったように主人公の能力を次回報告します。

え、何で能力変えたかと？ご都合主義ですから（笑）

実際は『プロトタイプ』のゲームがそこまで知らないからです。すいません。ｍ（＿＿）ｍ

ではまた次回！

ｂｙ天翔る堕天使より。

第０００．７話　これからの主人公の能力説明（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。

今はマジですいません、としか言えません。（Ｔ　．　Ｔ）

能力はもう二度と変えないので、許して下さい。

第０００．７話　これからの主人公の能力説明

名前　・・・・・・カク
性別　・・・・・・男性
一人称　・・・・・・ワシ、～じゃ
容姿
【服装】・・・・・『ＣＰ９』の服装、又は『ガレーラカンパニー』の服装
【目】・・・・・黒色
【髪】・・・・・オレンジ色の短髪
【身長】・・・・・１８０センチ
【体重】・・・・・７０キロ
【年齢】・・・・・２３歳

～新しい能力～

六式（ろくしき）

ＣＰ９が体得している６種類の超人的体技。長い訓練を重ね全身を武器とする。６種類すべてを体得した者を「六式使い」と呼ぶ。

指銃（シガン）・・・指で敵の体を撃ち抜く。技のバリエーションは「一転集中」という点は共通するが、必ずしも「指から」とは限らない。基本的に鉄塊が習得できていないと使用不可能。

嵐脚（ランキャク）・・・蹴りで呼び起こす鎌風。

剃（ソル）・・・瞬発的に加速し、消えたように移動する移動技。

鉄塊（テッカイ）・・・・肉体の硬度を鉄の甲殻にまで高める防御技。　但し鉄を砕く程の強度を防ぐ事は不可能。

月歩（ゲッポウ）・・・・爆発的な脚力で空を蹴って宙に浮く回避技。

紙絵（カミエ）・・・・敵の攻撃を紙の如くヒラヒラと避ける回避技。

六王銃（ロクオウガン）・・・・六式を極限まで高めた者が使える六式。

生命帰還（せいめいきかん）・・・・意識を身体のあらゆる所に張り巡らせ、操る技。

～詳しい技～

ロブ　ルッチ

動物系悪魔の実「ネコネコの実　モデル”豹（レオパルド）”」

技一覧

六式

指銃「黄蓮（オウレン）」・・・・片手で連射する指銃。

剃刀（カミソリ）・・・・鋭い軌道で空を走る、剃・月歩の複合技。

＊嵐脚「豹尾（ヒョウビ）」・・・・豹形態で放つ螺旋を描いて飛ぶ嵐脚。

鉄塊「空木（うつぎ）」・・・・鉄塊によるカウンター。常人ならば拳が割れる。

＊飛ぶ指銃「撥（バチ）」・・・・豹形態で、鋭い人差し指の爪の先から空気の塊を弾き飛ばす。

＊飛ぶ指銃「三撥（ミツバチ）」・・・・アニメオリジナル。撥の3連射。

＊飛ぶ指銃「火撥（ヒバチ）」・・・・アニメオリジナル。人差し指の爪の先に発生させた炎の塊を弾き飛ばす。

嵐脚「凱鳥（ガイチョウ）」・・・・羽を広げた鳥の様な嵐脚で鉄の外版に切れ込みを入れる。

指銃「斑（マダラ）」・・・・両手で連射する指銃。

六王銃（ロクオウガン）・・・六式を極限以上に極めた者が使える六式最終奥義。両手の握り拳を相手に構えて衝撃を送り込む。

＊最大輪（さいだいりん）「六（ろく）・王（おう）・銃（がん）」・・・・生命帰還を解除し、相手が逃げられないように尻尾で掴みフルパワーで放つ六王銃。

＊生命帰還・・・・紙絵武身（カミエブシン）生命帰還の一種で筋肉を収縮することでパワーを落とす代わりにスピードを上げる。

カク

動物系悪魔の実「ウシウシの実　モデル”麒麟（ジラフ）”」

技一覧

六式

嵐脚「白雷（はくらい）」・・・・上方から撃ち落す嵐脚。

嵐脚「乱(らん)」・・・・嵐脚の乱れ撃ち。

＊嵐脚「周断(あまねだち)」・・・・キリン形態によるリーチ・重量増大、そしてこれによる遠心力を利用して放つ最強の嵐脚。

嵐脚「線(せん)」・・・・一直線に走る嵐脚。

＊鼻銃(ビガン)・・・・キリン形態の鼻で放つ指銃。岩に穴を開けるほどの威力がある。

＊極・鼻銃「麒麟マン射櫓　（キリマンジャロ）」・・・・首を縮めた「キリン砲台」から撃ち出す究極の鼻銃。

＊鉄塊「無死角(ムシカク)」・・・・鉄塊状態で体を折りたたんで四角にする。

＊嵐脚「麒麟時雨(キリしぐれ)」・・・・嵐脚を天井に向かって乱れ撃ちし、天井から跳ね返ってきた斬撃の礫を降らせる。斬撃は自分にも降りかかるが鉄塊で防ぐ。

＊嵐脚「龍断(ロウダン)」・・・・両足で縦に放つ嵐脚。

＊嵐脚「ネジ白刃(ネジはくじん)」・・・・体を回転させながら放つ嵐脚。

嵐脚手裏剣・・・・手裏剣状の嵐脚を乱れ撃つ技。

＊鎌麒麟・・・・キリン形態の首で相手をなぎ払う。

＊パスタマシン・・・・首を縮めすぎると何故か手足が伸びてし

まったことで命名。邪魔な首を仕舞い手足のリーチが長くなる利点がある。

＊鞭竹林（へんちキリン）・・・・首を鞭のように相手に叩きつける連続攻撃。

＊猛竹林（もうちキリン）・・・・鼻銃の連続攻撃。

＊逆鱗（げキリン）・・・・嵐脚・二刀を使った四刀攻撃。

ジャブラ

動物系悪魔の実「イヌイヌの実　モデル”狼（ウルフ）”」

六式使いで唯一、全身鉄塊状態で動く事ができ、それを利用した「鉄塊拳法」を駆使する。

技一覧

六式

十指銃（ジュッシガン）・・・・両手の付け根を合わせて攻撃する十本の指による指銃。

月光十指銃（ゲッコウジュッシガン）・・・・月歩で勢いをつけた十指銃。

＊嵐脚「孤狼（ころう）」・・・・波の様に跳ねていく嵐脚。

＊嵐脚「群狼連星（ルーパスフォール）」・・・・４つの狼の形をした嵐脚を放つ。

鉄塊拳法（てっかいけんぽう）

＊狼弾（オオカミハジキ）・・・・鉄塊をかけた両腕で敵を弾き飛ばす。

＊狼牙(ろうが)の構え。・・・・鉄塊をかけた防御技での構え。

＊狼芭(ろうば)の構え・・・・腰を落とした状態で両手をついて、体を浮かせた構え。

＊狼狩(ろうかる)エリア・ネットワーク・・・・狼芭の構えから四方八方から浴びせる斬撃。

＊重歩狼(ドン・ポー・ロウ)・・・・鉄塊をかけた手で放つ強力なパンチ。

＊魔天狼(マテンロウ)・・・・鉄塊をかけた両足で敵を蹴り上げる。

ブルーノ

超人系悪魔の実「ドアドアの実」

六式

鉄塊「輪(りん)」・・・・鉄塊状態で両足を一直線に伸ばし、側転のように、回転しながら攻撃する。

鉄塊「砕(さい)」・・・・鉄塊状態で相手を殴りつける。

鉄塊「剛(ごう)」・・・・最強強度の鉄塊。

ドアドア・・・・壁などの触れた物にドアを作る。閉じると元に戻る。

空気開扉(エアドア)・・・・ドアドアの実の真骨頂。大気の壁にドアを作り出し自由に移動ができる。

回転ドア・・・・触れたものに回転ドアを作る。ドアドア同様閉めると元通りになる。

フクロウ

技一覧

六式

六式遊戯「手合(てあわせ)」・・・・相手の体技の強さを攻撃を受けることによって測る能力。

獣厳(ジュゴン)・・・・指銃の速度で打ち抜く超重量パンチ。

「獣厳」奥義梟(フクロ)叩き・・・・獣厳の連打。

鉄塊玉(テッカイダマ)・・・・鉄塊状態、かつ剃の速度で高速回転して相手に突っ込む。

紙絵「軟泥(スライム)」・・・・体をスライムの様に変形させて攻撃を避ける。

今回はクマドリとカリファの能力は無しの方向で行かせてもらいます。

【＊】このマークはその悪魔の実を使用中にならできます。

見た目はカクですが、ルッチやジャブラの悪魔の実を使用中はルッチやジャブラが悪魔の実を使っている姿っぽくなります。

もちろんカクもそうです。

～魔法剣とエルザの能力っぽいやつ～

『魔法剣』と言っても、カクがゾロと戦っていた時の普通の刀。
但し、自分の身体の大きさに合わせて、刀も大きくなる。
『エルザの能力っぽいやつ』とは、ただ単に自分の服装を変えるだけで、『能力付きの鎧』とかにはならない。ただの『服装が変わる』程度。

第０００．７話　これからの主人公の能力説明（後書き）

何だか、膝が痛いので温めながらねます。

皆さんも体調管理には気を付けて下さい。

ではまた次回！

ｂｙ天翔る堕天使より。

第０００．８話　時は過ぎて〈原作突入１週間前〉（前書き）

どうも天翔る堕天使です。

最近ｉＰｈｏｎｅのメモ帳に下書きをしていたら、メモ帳の中身のデータが吹っ飛びました。（笑）

あの時はショックのあまり、全力投球でｉＰｈｏｎｅベットに投げ込みました。（，´Д｀）ｙ┻･~~

そんなこんなで始まります。

第０００．８話　時は過ぎて〈原作突入１週間前〉

～Ｓｉｄｅ　カク

どうもこんにちは、フェアリーテイルのギルドに所属しているカクじゃ。今は原作突入の約１週間前になって、ワシは２３歳になった頃じゃ。

この間に合った出来事を簡単に分かりやすく箇条書きで説明をしていこう。

１．Ｓ級魔導士になった。
＊理由は特に無し。

２．ミラの妹、リサーナがエドラスに飛ばされた。
＊止める理由は無く、原作に沿っていく為。

３．ミラと付き合ってる。
＊決定事項。

４．ギルターツにあの薬を渡した。
＊原作で酷い怪我した筈だから。

５．異名を幾つか貰った。
＊【山風（やまかぜ）】【嵐（あらし）】これは、『正規の人達』によく言われる。理由としてはよく走り回っているからじゃと思う。
＊【妖精の化物（フェアリーモンスター）】【動物化物（アニマルモンスター）】は『闇ギルドの関係者』によく言われている。悪魔の実でや六式、ベクトル操作で暴れてるからみたいじゃ。

ワシが依頼を終えて森の中にある一本道を通ってギルドに帰っていると、目の前にから荷台を引いてる3人組が目に入った。一見すると特に変わった所は特に無いただの商人だが、1人がワシに気付いたのか前にいる2人に話し掛けている。
ワシは見聞色の覇気で、何気なく荷台に積まれている荷物を確かめてみると、荷物の中から数人だが人の気配がした。恐らく盗賊か何かの類じゃろう。

カク
「そこの商人さん。道を聞きたいんじゃがちょっと良いかの？」
商人A
「悪いが俺らはここら辺には住んでいないから、あまり知らないんだよ。すまんな。」

あくまでも奴等には知らないフリをして荷台にいる人達に危害が加わらないようにする為なるべく『敵意』を与えないつもりじゃったが。

カク
「そうじゃったか、急に話し掛けてすまんの。しかし、荷台に人を入れて運ぶのはなかなか出来る事では無いんではないのか？」
商人A
「な、何の事でしょうか？」
商人B
「おい、やれ。」ボソッ

カク
「何をやるつもりなんじゃ？」スッ
商人Ａ＆Ｂ＆Ｃ
「「「！」」」
ワシは剃（ソル）で瞬発的に加速して消えたように移動し、商人Ｂと商人Ｃの首筋に刀を突きつけた。
商人Ｃは既に右手に魔法剣を出していたので明らかに怪しい。仮に『やましい事』が無いのであれば抵抗はしない筈だが。

商人Ｂ
「べ、別に俺らは何もしてないぞ！」
商人Ｃ
「た、ただ単に荷物を運んでいるだけだ！」
カク
「本当の事を言うと？」ギロッ！
商人Ａ
「盗みました！」

ワシは取り敢えず、嘘をついた商人Ｂ＆Ｃの首を刎ねて絶命させた。次に怖気付いている商人Ａに、刀を向けて『何処から盗んだ』のか聞くと恐怖で慌てている。
仕方がなく刀を仕舞い、男の髪の毛を掴み上げて無理矢理立たせ商人Ａに再度聞いてみた。

カク
「１０秒以内で『何処から盗んだ』か答えるんじゃ。１０・・９・

・8・・7・6・5・4「お、俺達が来た道を1キロ程も、戻った所の街からです！」・・・わかった。指銃（シガン）！」ドスッ！
商人A
「な・なん・・で・・・・。」ドサッ
カク
「ワシは別に『助けてくれ。』と言われた覚えないぞ？さて、取り敢えずは荷台にいる人を起こすかの・・・・・こいつ等を片付けてから。」

ワシはひとまず3人を道の見えない所に隠して荷台にいる人を起こした。どうやらガスか何かで眠らされており、目立った怪我はしていなかった。
その後ワシは荷台にいた数人に事情を話して、街まで案内をして貰い彼らの街に着いた。そして同時にワシは逃げた。何故って？
街の皆が荷台にいる人達を見たら、鬼の形相で駆け寄って来たからじゃ。ワシは当然、剃（ソル）と月歩（ゲッポウ）を使いその場からダッシュでギルドの方へ逃げ去った。因みに月歩（ゲッポウ）とは爆発的な脚力で空を蹴って宙に浮く回避技である。

カク
「ここまで離れればもう来ないじゃろ・・・・んっ？あの後ろ姿は・・・ミストガンかの？・・・よっ。ミストガン最近の『アレ』の方はどうじゃ？」
ミストガン
「カクか、久し振りだな。『アレ』はまあまあだよ。数は前より少ないけど少しずつ大きくなって来ている。」

今ワシと話している男が『ミストガン』又の名を『エドラス版ジェラール』。だいぶ前に仕事先で出会った時には『アレ』を塞いでいる時だったのでかなり気まずい雰囲気だった。
その結果出た結論が『この事は秘密にする』という普通の結果だった。因みにミストガンは『妖精の尻尾(フェアリーテイル)最強の男候補』でもあるらしい。

カク
「そうか。そういえば薬の方は大丈夫か？また補充でもするかの？」
ミストガン
「いや、まだ大丈夫だろう。『大きくなった』と言ってもそんなに立て続けにでは無いし、塞げれるから平気だ。」
カク
「そうか・・・ではまた、機会があれば会おうかの。」ニコッ
ミストガン
「フッ、そうだな。またいずれ会おう。」

ワシはミストガンにそう言うと、互いに反対方向に進んで行った。ワシはギルドなは向かい、ミストガンは依頼をこなすか『アレ』を塞ぎに行った。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　カク

第０００．８話　時は過ぎて〈原作突入１週間前〉（後書き）

今回はだいぶ短い話でしたが、次回も短いと思います。

そろそろ大晦日が近づいて来たので、皆さん羽目を外さないよう気を付けて下さい。

ではまた次回。

ｂｙ天翔る堕天使より。

第０００．９話　時は過ぎて〈原作突入１日前〉（前書き）

どうも！天翔る堕天使です。

次回から前書きを書かなくなるかもしれないので、ご理解して下さいｍ（＿＿）ｍ

そんな訳で始まります。

第０００．９話　時は過ぎて〈原作突入１日前〉

～Ｓｉｄｅ　カク

ついに明日が原作突入の日じゃ。確かナツがハルジオンの街に行き『ルーシィ』という人物に会うはずじゃ。なのでワシは明日の予定を開けておいてナツと行った方が良いと思い、依頼を２・３個片付けて帰って来た。

すると『アルザック』という青年がワシに声をかけて来た。

アルザック
「カ、カクさん相談したい事が有るんですがよろしいですか？」
カク
「構わんぞ。じゃがビスカとの恋愛相談については、上手く教えられるか分からんがの。まあ、座って話そう。」
アルザック
「な、なんで解ったんですか！／／／」

彼の名前はアルザック。西武の大陸から移民でやって来た魔導士。技は銃弾魔法（ガンズマジック）という銃に魔法の弾を装填する魔法。

彼は同じギルドに所属している『ビスカ』に気が有るのだが、なかなか思いが告げられないのでいる。しかし周りの人の大半は、その事については気づいている。

カク

「逆に聞くが、お主はその相談事を今年でワシとミラに何回きいてきたのかの？」
アルザック
「ご、５回程でしたっけ。」
カク
「残念ながらその数は今月の回数で今年の回数は覚えてる限りで２０回程じゃ。そういえば何故お主は告白しないんじゃ？」

実はアルザックはビスカの事が好きであり、ビスカはアルザックの事が好きというまさかの両思いなのだが、なかなか思いが告げられないのでそのままの関係になっている。
もちろんこの事はギルドのほぼ全員が知っているが、誰も教えないでいる。

アルザック
「そ、それは・・その・・ビ、ビスカが僕の事・・好きか分からないし・・そ、それに僕はカッコ良くないから。」
カク
「アルザック、それはワシからすれば嫌味にしか聞こえないんじゃが・・・・取り敢えず殴ってもいいかの？」ニコッ
アルザック
「へっ？」

ワシは取り敢えずアルザックにブチ切れそうじゃったが、なんとか踏み止まった。ブチ切れる理由？ワシの鼻を見てから言ってほしいもんじゃ。
今のワシを遠くから見れば笑顔でアルザックと笑い話をしている

ようじゃが、実際は青筋を立てながら笑顔で怒っている。
初めの頃はナツやグレイに鼻の事で笑われていたから、動物系悪魔の実「ウシウシの実　モデル”麒麟(ジラフ)”」で1日中追いかけ回したり、半殺しにしたお陰でギルドの皆からは『カクに鼻の事で茶化してはいけない。』と、暗黙の了解ができた。
もちろんこの事を何も知らずに茶化した人には、脅しを入れた分かりやすい説明をしている。

アルザック
「あ、いや、そんなつもりはないんですよ。そ、そういえばカクさんとミラさんってどうやって付き合ったんですか？」
ミラ
「はーい。それは私が説明しましょう。」
アルザック
「ミラさん！」ガタッ！
カク
「いつからそこにおったんじゃ・・・いや、何処からワシ達の話を聞いておったのじゃ。」

この女性がワシと付き合っている『ミラジェーン』で、妖精の尻尾の従業員をやっている、ギルドの看板娘。別の仕事で、雑誌でグラビアの仕事をしている為、ある程度の有名人。

ミラ
「アルザックが『そ、それは・・その・・ビ、ビスカが僕の事・・好きか分からないし・・そ、それに僕はカッコ良くないから。』って辺りからよ。」ニコッ

アルザック
「か、かなり最初の方ですね。／／／」
カク
「はぁ、それでミラはワシ達に何の話をしてくれるんじゃ？」
ミラ
「もちろんカクとファーストキスをした時の話をするつもりだけど？どうして？」
カク
「」

ワシは取り敢えずその場から立ち去ろうと席から立ち上がると、ミラがワシの服の裾を両手で掴みながら涙目で上目遣いをしたので仕方がなく席に座った。
女の涙は何より強い。もし核爆弾を落とされたとしても、1人の綺麗な女性が泣いていたら核爆弾は簡単に負けると思う。

ミラ
「別にいいじゃない。減るもんでもないのに話す位なら。それにアルザックの為でもあるのよ・・・・協力してくれる？」ウルウル
カク
「もちろんOKじゃ、いくら言っても構わんぞ。キスが終わった後にワシが『ピーー』をしてミラが『ピーー』した後にワシとミラが『ピーー』して2人で『ピーー』をした話とかもOKじゃ。」
アルザック
「なっ！？」
ミラ
「あら、でもキスが終わった後はカクが『ピーー』をして私が『ピーー』した後に私達で『ピーー』してる時はまるで『野獣』みた

いにすごかったわ。」

アルザック

「ちょ、ちょっと待って下さい！僕はミラさんからカクさんと始めてのキスをした話を聞くだけであって、その後は別に興味が無いわけではないですが今はいいです！」アセアセ！

どうやら少し・・・いや、かなり話が脱線してしまったのかもしれないが今日の本題に入るとするかの。ワシとミラはファーストキスの状況を詳しくアルザックに教えた。

内容は、ほぼノロケ話だったのは言うまでもない。

カク

「と、まあその時の状況は噛み砕いた言い方で言えばこんな感じかの。まあ、後はワシがミラにキスをする時にワシの鼻が長いのをうっかり忘れていて、ミラの顔に当たってしまった位かの。」

ミラ

「あの時は私達緊張してたからかもしれないげど、それのお陰でその後はリラックス出来たしね。その後に『ピーー』とか出来たから今となっては良い思い出よね。」

ワシとミラが2人だけの世界に入りそうになっていたが、ワシは横に黙って座っているアルザックに話を振った。

カク

「ところでアルザックは、どこまで話をきちんと聞いていたのか教えてくれるかの？」

アルザック
「・・・・・途中から聞いてませんでした。」（／／ｏ／／）
ミラ
「もう・・・要は、『アタックしたらなんとかなるもの』って事よ。アルザックは奥手だから少しはビスカを押してみれば？」
カク
「そうじゃの、じゃがあまりアタックし過ぎてはいかんぞ。時には優しく接しないと『ジェット』と『ドロイ』みたいになってしまうからの。」

ワシの話に出て来た『ジェット』と『ドロイ』とは、アルザックと同じ様にギルドにいる『レビィ』に気が会ったのだが、２人は全力で告白したのじゃが、瞬殺されたらしい。
その後レビィはワシに恋愛相談したのだが、どうやらあの２人はタイプでは無かったようじゃ。一応ワシはレビィに『早いうちに相手は見つかるじゃろう。』と言っておいた。

ミラ
「ならアルザックとビスカの２人で今度ランチでもしながらデートでもしてみれば？もちろんビスカには『一緒にランチでも？』って言えば何とかなるんじゃない。」
カク
「それは名案じゃのうミラ。じゃが今のアルザックにはまず、付き合う方が先じゃろう。」
アルザック
「が、かんばります。」

今回のアルザックとの恋愛相談は終わり、アルザックは席から離れて行くのを確認した後に『ロキ』を呼び寄せた。ロキにはアルザックに『ビスカは可愛いから早くしないととっちゃうよ。』も言ってもらうように頼んでおいた。

ロキは最近来たのじゃが、どうも精霊らしい。この事を知っているのは恐らくワシだけなのでよく気を使ってはいる。それなのだが彼は、『自業自得さ。』とよく笑顔で言っている。薬を渡して飲ましても効果は薄いが、効果が無いよりましと思い1ヶ月に1回飲ましておる。

カク
「これでアルザックも、どうにかなるじゃろう・・・んっ？ナツがやけに騒がしいの。ミラ、ちょっと席を外すぞ。」
ミラ
「はーい、いってらっしゃ～い。」（，　▽　、　）ノシ

ワシは一旦席から離れて、騒がしいナツ達のそばに近寄り話に紛れ込む事にした。

ナツ
「それ本当か！ハルジオンの街に火竜（サラマンダー）がいるのか！」
モブ出っ歯
「ああ、俺の聞いた噂だとそうだぜ。でも今日から行くと遅くなるんじゃねぇか？」
ナツ
「そんなの気にしねぇよ。もしかしたらイグニールかもしれねぇんだからよ、はやくしてぇーじゃんか！」
ハッピー

「でもナツは乗り物に乗れないから無理じゃないの？」
カク
「ならワシも着いて行っても良いかの？丁度ワシも明日ハルジオンの街に用事があるからついて行くのはいいかの？」

ワシは、ナツについて行く為に嘘ではないがついて行く為の口実を持ち掛けた。

ナツ
「本当か！じゃあ頼むぞカク！ハッピー、今からハルジオンの街に行く準備するぞ！」
ハッピー
「あい！」
カク
「気が早いの。行くのは明日だというのに・・・取り敢えずワシも支度でもするかの。」

ワシらは明日ハルジオンの街に行く為に支度を始めた。早く明日にならんか楽しみじゃったが、先程頼み事を任せたロキが『アルザックにライバル相手にされちゃったよ。』と愚痴って来た。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　カク

第０００．９話　時は過ぎて〈原作突入１日前〉（後書き）

やっと次回から原作突入出来るのでか～な～りテンションがアゲアゲです！

♪――Ｏ（≧∇≦）Ｏ――♪

ではまた次回！

ｂｙ天翔る堕天使より。

第００１．０話　妖精の尻尾・・・前半

～Ｓｉｄｅ　カク

駅員

「あ・・あの・・お客様・・・・だ・・・・大丈夫ですか？」

駅員は具合の悪そうなナツに声をかけた。

ハッピー

「あい。いつもの事なので気にしないで下さい。ハルジオンの街に着いたよカク。」

カク

「んっ？そうか、起こしてくれてありがとうハッピー。それにしてもナツは相変わらずじゃの。」

ナツは乗り物が苦手で『乗り物』なら5秒はもたない程に苦手なのだ。それなのに今日は列車でハルジオンの街までやって来た。

ナツ

「無理！！！もう二度と列車には乗らん・・・・うぷ」

ハッピー

「情報が確かならこの街に火竜（サラマンダー）がいるハズだよ。行こ。」スタスタ

カク
「よっこいしょ。ワシらは先に降りているから早くついて来るんじゃぞナツ。」スタスタ

ナツ
「ちょ・・・・ちょっと休ませて・　・」グデー

ハッピー
「うんうん・・・・あ」

ナツ
「！」

ワシとハッピーは先に列車から降りてナツが来るのを待っていると、ナツを乗せた列車は次の駅に向かい走り出した。

ハッピー
「出発しちゃった・・どうしようカク。」

カク
「はぁ、ハッピーはココで待っててくれるかの。すぐにナツを連れて来る。」つ小魚

ハッピー
「あいさ！」モキュモキュ

ナツ
「た～す～け～て～」

ワシはナツを助けに走っている列車に飛び乗り、ナツを引き摺り下ろした。どうやらまだ酔っているようじゃが気にせずにいようかの。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　カク

～Ｓｉｄｅ　ルーシィ

ルーシィ
「えーーーっ！！？この街って魔法屋が一軒しかないの？」

店主
「ええ・・・・元々、魔法よりも漁業が盛んな街ですからね。町の者も魔法を使えるのは一割もいませんので、この店もほぼ旅の魔導士専門店ですわ。」

どうやらあたしの欲しかった『門（ゲート）』はあまり期待が持てそうもないわね。

ルーシィ
「あーあ・・・・無駄足だったかしらねえ。」

店主
「まあまあそう言わずに見てってくださいな。新商品だってちゃんとそろってますよ。女の子に人気なのはこの『色替(カラーズ)』の魔法かなその日の気分に合わせて・・服の色をチェンジ～ってね。」シャキーン

ルーシィ
「持ってるし。あたしは『門(ゲート)の鍵』の強力なやつを探してるの・・・・あ？『白い《ホワイト》小犬(ドギー)』！！！」

やっと探してた内の一つが見つかった！あんまり強くはないけど可愛いから欲しかったのよ。

店主
「そんなのぜんぜん強力じゃないよ。」

ルーシィ
「いーのいーの？探してたんだぁー。いくら？」

店主
「2万J」

う～んちょっと高いかな。ならココはあたしのお色気作戦！胸を

両腕で少し持ち上げて見える様にかがんでからの上目遣い。

ルーシィ
「本当はおいくらかしら？ステキなおじさま？」ムニュ？

これでどうだっ！

ルーシィ
「ちぇっ、１０００Ｊしかまけてくれなかったー。あたしの色気は１０００Ｊかーーーっ！！！」

さっきのお色気作戦は失敗して少ししか負けてもらえなかった・・・。ムシャクシャしたので近くの看板に八つ当たり！
街の人がびくついてるけど気にしないでいよっと。

ルーシィ
「！」

前の方を見ていると、黄色い歓声が上がっているのに気がついた。
大勢の女の子が広場に集まっているみたい。

ルーシィ
「？何かしら。」キョトン？

あたしが首をかしげていると横から女の子が話ながら駆けている。

女達1
「「この街に有名な魔導士様が来てるんですって！！」」

女達2
「「火竜様（サラマンダー）よーーーっ？」」

後ろからき来た女の子達に弾き飛ばされそうになってしまった。
でも、今は怒る事よりも先に、

ルーシィ
「火竜（サラマンダー）！！？　あ・・あの店じゃ買えない火の魔法を操るっていう・・・。この街にいるのっ！！？」パァッ！

あたしの興味は一気にそちらにむいてしまった。だってとっても有名な人物だしそれに、

女達
「「「「「キャー、キャー、火竜様（サラマンダー）～こっち向いて～キャー、キ

ヤー」」」」」

目をハートにした女の子達がどんどん増えていくみたいだから・・・・。

ルーシィ
「かっこいいのかしら」

しょうがないよ、あたしもその女の子の1人だもん！あたしも火竜（サラマンダー）のところへ行ってみることにしよっと。

～Side Out ルーシィ

～Side カク

ナツ
「列車には2回も乗っちまった・・・・はぁ。」

ハッピー
「ナツは乗り物凄く弱いもんね。」

カク

「コレなら歩いて来た方がまだマシじゃったかもな。」

ナツ
「ハラは減ったし・・・・・・」

ハッピー
「オイラはさっきカクから魚を貰ったから平気だよ。」

カク
「ナツ、後で好きなだけ奢ってやるから我慢せんか。」

ワシはヨタヨタ歩いているナツと満足そうなハッピーと歩いておる。
今のワシの服装はというと、『ガレーラカンパニー』の服装じゃ。この服はだいぶ気に入っているからあと3着は持っている。

ナツ
「サンキューなカク。なあ、火竜(サラマンダー)ってのは『イグニール』の事だよなぁ」

ハッピー
「あい。火(ひ)の竜(りゅう)なんてイグニールしか思いあたらないよね。」

ナツ
「だよな・・・・やっと見つけた！ちょっと元気になってきたぞ！」

ハッピー

「あい。」

カク
「にしても何処(どこ)におるのか分からんの。」

ワシは見聞色の覇気で街中を捜しておると、見覚えのある『女の子』とあの『いけすかない男』が随分近くにいた。
そして耳を済ませておると女達の歓声が聞こえてくる。

女達
「「「「火竜様(サラマンダー)〜」」」」

ナツ&カク&ハッピー
「「「!」」」

ナツ
「ホラ!!噂をすればなんたらって!!」

ハッピー
「あい!!!!」

カク
「あっ!待つんじゃナツ!」

ワシが驚いている間にナツとハッピーは顔を輝かせて声の方へ走っておる。まるで欲しかったオモチャでも見つけたようじゃ。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　カク

～Ｓｉｄｅ　ルーシィ

女達
「「「「「キャー、キャー、キャー、キャー」」」」」

ルーシィ
「（な・・な・・な・・なに？このドキドキは！！？ちょ・・・・・ちょっと・・・！！あたしってばどうしちゃったのよ！！！）」

火竜（サラマンダー）
「ははっ、まいったな。これじゃ歩けないよ。」

女の子の中心でたたずむ一人の男。どうやら彼が火竜（サラマンダー）みたい。あたしはその人を見た瞬間に平常心じゃいられなくなっちゃった。えっ？なんで？

火竜（サラマンダー）
「ん？」チラ

ルーシィ
「（はうぅ！！！！）」キュン

ドキドキしていると彼と目があっちゃった！だめ、胸がくるしいっ！

ルーシィ
「（有名な魔導士だから？だからこんなにドキドキするの！！？）」

ナツ
「イグニール！！イグニール！！！」

なんだか変な声が聞こえるけど不思議と気にならない。

ルーシィ
「（これってもしかしてあたし・・・）」ふらっ

あたしが彼に少しでも近づこうと一歩踏み出そうとしたその時、

ナツ
「イグニール！！！」

カク
「ちょっと待たんかナツ。」

1人の少年と1匹の猫、その後ろに1人の鼻が長い男性が目の前に突然現れた。

～Side　Out　ルーシィ

～Side　カク

ナツ
「イグニール！！！！！」

火竜（サラマンダー）
「！」

ルーシィ
「はっ！！」

カク
「（あぁ、彼女がルーシィか・・・以外と可愛いの。）」

ワシとナツとハッピーは一緒に女達の中に割り込んで来た際に、見たことある女の子を見つけた。
じゃがこの時はあえて知らない振りをするのが鉄則じゃ。お互い始めて顔を見たのに名前を知っていたら変に警戒されてしまうから

の。
しかしナツが入った瞬間はまるで時間が止まっているみたいじゃの。まあ、それでルーシィは正気に戻ったみたいじゃから良しとするかの。そしてナツの一言で時は動き出した。

ナツ
「誰だオマエ」
火竜（サラマンダー）
「！！！」

汗をかなり流しているナツと、ナツの言葉にショックを受けている男がしばらく顔を合わせていると、

火竜（サラマンダー）
「火竜（サラマンダー）と言えばわかるかね？」キリッ

男・・もとい、火竜（サラマンダー）が決め顔を作ってまで言ってくるのじゃが、

火竜（サラマンダー）
「はやっ！」

この男は後ろにいるナツとハッピーにビックリしている。何故って遠くには落ち込んでいるナツとハッピーが『トボトボ』と効果音

が似合う程の暗さで帰っているからじゃ。
なんだか気まずいのでワシはこの男に結果は解っているが、あえて質問をしてみることにした。

カク
「お主は見かけによらず・・『竜(ドラゴン)』なのか？」

火竜(サラマンダー)
「はぁ！？そんな分けないでしょ！？俺は見かけ通り人間だっ！！」

いや、そこまで怒らんでも良いじゃろ。

カク
「イグニールではないのか？」

火竜(サラマンダー)
「違うっ！！俺はそんな名前じゃない！！俺は火竜(サラマンダー)だ！！！」

やはり人違いだったらしいので諦めて帰るとするかの。

女1
「ちょっとアンタ失礼じゃない！」ぐいっ！

ナツ

「おっ！？」

女2
「そうよ！！火竜（サラマンダー）様はすっごい魔導士なのよ！」

ナツ
「おっ？」

女3
「あやまりなさいよ！」

ナツ
「なんだオマエら！？」

そうこうしてるとナツが女達にマフラーを掴まれ、首を絞められながら帰ってきたようじゃ。お帰り・・・・かの？

火竜（サラマンダー）
「まあまあその辺にしておきたまえ。彼とて悪気があった訳じゃないんだからね」

この男はまたキメ顔でナツに話し掛けたがナツは相変わらずどうでもいいらしい。女達の黄色い声に適当に答え男は自分のサインを書き出した。
ルーシィはこの男を睨んでるみたいじゃの。そして書き終わったらしくナツにひざまずきながら、

火竜（サラマンダー）
「僕のサインだ。友達に自慢するといい。」
またしてもキメ顔をして言う火竜（サラマンダー）。周りからの黄色い声に対してナツは一言、
ナツ
「いらん」
そしてそれを断わるナツ。ナツ、もう少しだけ悩む素振りを見せようにせんか。大人になってからじゃ遅いからの。
女達
「「「なんなのよアンタ！！！どっか行きなさいっ」」」ドゴッ
ナツ
「うごっ」ズシャ
カク
「紙絵（カミエ）。まったく危ないの。」
当然のようにけりだされるナツ。ワシは紙絵（カミエ）て敵の攻撃を紙の如くヒラヒラと避ける回避技を使って人混みから遠ざかった。

火竜（サラマンダー）
「君達の熱い歓迎には感謝するけど・・・・・・僕はこの先の港に用があるんだ。失礼するよ」パチンっ

そう言って男が左手の指をはじくと、炎が出てきて男が舞い上がる。

火竜（サラマンダー）
「夜は船上でパーティをやるよ。みんな参加してくれるよね？」

女達
「「「「「「もちろんですぅ～」」」」」」

周りにいた女達を誘う男はそのまま港の方へ行ったようじゃ。

ナツ
「なんだアイツは」

カク
「ただの火の魔導士じゃろうな。恐らくじゃがそんなに強くは無いじゃろうがの。」

ナツ
「？何でカクはそんなの分かるんだ？」

カク
「何となくじゃがそんな気がするだけじゃ。」ニカッ

ワシとナツが話していると急に後ろから

ルーシィ
「本当、いけすかないわよね。」

ナツ&カク
「「んっ？」」

後ろを向くと濃いブロンドの髪をくくった女の子がそこに居(お)った。
まぁ、ルーシィが声をかけてきたのじゃかの。

ルーシィ
「さっきはありがとね」ニコッ

ナツ&ハッピー
「「？」」

カク
「こんにちはお嬢さん。別に気にせんでも良かったのじゃが。」

ナツとハッピーは首をかしげていたが、ワシは挨拶をしといた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　カク

～Ｓｉｄｅ　カク

ナツ
「あんふぁいいひほがぶぁ」グバボバボバボ！！

カク
「今ナツは『アンタいい人だな。』って言ってるようじゃ。」モグモグ

ハッピー
「うんうん。」ほぐほぐ

ワシは暴走するかのように飯を食べるナツの通訳をしながら飛んで来ている『汁』を避けながらルーシィをかばっている。
そしてコレは浮気ではないから時々肩を掴んで『汁』を避ける為に引っ張っても何も問題は無いはずじゃ。
因みにワシらはルーシィと一緒にレストランに入っている。

ルーシィ
「あはは・・・・ナツとハッピーだっけ？　ゆっくり食べなって。それにカクさんはもっと食べなくていいんですか？」

ルーシィは苦笑気味にワシに聞いてくるが、この子はいい子じゃの・・・・胸はデカイがミラ程ではないの。

カク
「ああ、ワシはこの位で平気じゃ。それにワシが全部出すからルーシィさんも食べんかの？」

ルーシィ
「えっ！？困りますよそんな。あたしは助けてもらっただけですから。」

ルーシィは、さっきの火竜（サラマンダー）は魅了（チャーム）を使っていたらしくあれは発売が禁止にはされていたらしい。あの場に居た女達が少し心配になってきたがワシらが何とかするから平気じゃろ。
じゃがルーシィはワシ達が飛び込んだおかげで魔法が解けて助かったみたいじゃ。

カク
「いいんじゃよ別に。ワシはコレでも結構稼いでるから平気じゃ。ナツだって君を助けようと思って助けたわけじゃないんじゃ。それに『カワイイ年下の女の子』に奢らせたら男として恥ずかしいからの。」

ワシがそういうと少しだけ頬を紅くしてルーシィは引き下がった

のでウェイトレスにパフェのセットを1つ頼んだ。

ルーシィ
「あっ、そういえばこう見えてもあたし魔導士なんだぁ～」

カク
「ほぅ、そうじゃったのか。」

ナツ
「ほぼぉ」グボバボバ

ワシは相槌を打つがナツは何を喋っているのか全く解らなくなった。

ルーシィ
「まだギルドには入ってないんだけどね？　あ、ギルドって言うのはね、」

カク
「あ、その事については大丈夫じゃ。ワシの記憶じゃと仕事や情報を仲介(ちゅうかい)してくれたりする組合の様なものじゃろ？」

ルーシィ
「はいっ！そうなんです！カクさんも詳しいんですね！！」

嬉しそうな声を挙げるルーシィはそのままのテンションで、

ルーシィ
「でも人気のあるギルドは入るのが厳しいみたいなんです・・・・。あたしの入りたいトコはもうすっごい魔導士がたくさん集まる所で・・ああ・　・・・どーしよ！！入りたいけどき厳しいんだろーなぁ・・・。」

ナツ
「いあ〝・・・」

ルーシィ
「あーゴメンね魔導士の世界の話なんてわかんないよねー・・・・でも、絶対そこのギルドに入るんだぁ。あそこなら大きい仕事たくさんもらえそうだもん」

カク
「・・・・立派じゃの。」

思わずワシは褒めてしまう。何故って、これ・・・・うちのギルドの事じゃないのかの？なんだか現実とかけ離れている様な感じなのじゃが・・・・気にせんでおこう。
暫しの沈黙が続いていたが、ナツとハッピーは

ナツ
「ほ・・・・ほぉか・・」

ハッピー

「よくしゃべるね」

お主等は相変わらず失礼だな。ワシは心の中でため息をつき、目の前にあるパンをかじった。

ルーシィ
「そういえばあなたたちは誰か探してたみたいだけど・・・・・・」

ルーシィが聞いてくると、

ハッピー
「あい、イグニール」

ナツ
「火竜(サラマンダー)がこの街に来るって聞いたから来てみたはいいけど別人だったな。」

ハッピー
「火竜(サラマンダー)って見た目じゃなかったもんね。」

ナツ
「てっきりイグニールかと思ったのにな。」

ワシはこの全部がおかしいナツとハッピーの会話をルーシィと聞

いていると、ルーシィが、

ルーシィ
「見た目が火竜（サラマンダー）・・・・・・ってどうなのよ・・・・人間として・・・・」

ナツ
「ん？　人間じゃねぇよ。イグニールは本物の竜（ドラゴン）だ」

ルーシィ
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！」

ナツがそう言うとルーシィは驚愕の表情を浮かべておる。やっぱり生ではこんなにも違うんじゃの。

ルーシィ
「そんなの街の中にいるハズないでしょー！！！」

響き渡るルーシィの怒号。若干お店にいた客がビックリしている。

ナツ＆ハッピー
「「っ！！」」ぴくっ！

そして驚愕の顔に変わるナツとハッピーにルーシィは。

ルーシィ
「オイイ！！！今気づいたって顔すんなー！！！」

カク
「・・・・。」ズズズッ

ワシはルーシィのツッコミを聞いてコーヒーを飲んだ。ルーシィ、ナイスツッコミじゃ！

～しばらくして～

ルーシィ
「さて、あたしはそろそろ行くけど・・」

その後すこし話していたら、ルーシィが立ちあがる。

カク
「そうか、ではまた機会があれば会おうかの。」

ルーシィ
「あ、でもカクさん。これだけはもらってくれませんか。」

カク

「んっ？何をじゃ？」

ルーシィはワシに出してきたのはお金じゃった。いらないと言った筈なんじゃが・・・・。

ルーシィ
「あたしが助かったのは事実ですから・・少ないけどもらってほしいんです。」

カク
「そういうことか・・すまんの、ルーシィさん。」

ルーシィ
「いえ、お構いなく。じゃあねナツ、ハッピー、カクさん。」

そういってルーシィはレストランから出て行こうと席から離れていく。するとナツが、

ナツ
「じゃあこれやるよ」つ色紙

ナツはいつの間にか火竜（サラマンダー）のサインを貰ったらしく、それをルーシィに渡そうとしたのだが、

ルーシィ
「いらんわっ！！！」

ルーシィに断られている。

その後ワシらはイグニールを探して街を回っていたがワシは途中からナツと別行動になり、適当に時間を潰していた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　カク

第００１．０話　妖精の尻尾・・・前半（後書き）

なんだか疲れてきました天翔る堕天使です。（´Д`）ｙ┻━┻・・・

若干ですが具合があまりよろしくない状況です。

それでも頑張って行きまっしょい！

ｂｙ天翔る堕天使より。

第００１．０話　妖精の尻尾・・・後編

～Ｓｉｄｅ　ルーシィ

あたしはあの後ナツ達と分かれて公園のベンチに座っている。手に持ってるのは魔法専門誌の週刊ソーサラー。あたしの入りたいギルドの情報も載っていた。

ルーシィ
「まーた妖精の尻尾（フェアリーテイル）が問題起こしたの？　今度は何？　デボン盗賊一家壊滅するも民家７軒も壊滅・・・・・・・」

これがあたしの入りたいギルドの名前。でもまだ続いている記事の内容では、たったそれだけであたしは限界だった。

ルーシィ
「あはははは っ！！！　やりすぎー！！！！！」

あたしはこらえきれずにベンチに仰向けになり足をばたつかせながら笑う。そして今度はグラビアページを広げると、

ルーシィ
「あ！　グラビア、ミラジェーンなんだ。妖精の尻尾（フェアリーテイル）の看板娘、

ミラジェーン・・・・こんな人でもめちゃくちゃやったりするのかしら？」

そこには白い髪に青い目をしたきれいな身体（スタイル）をした1人の女性の水着姿が写っていた。

ルーシィ
「ぷっ」

考えただけで噴出してしまう。そしてあたしはその本を閉じながら呟いた。

ルーシィ
「てか・・どうしたら妖精（フェアリー）の尻尾（テイル）に入れるんだろ？　やっぱ強い魔法覚えないとダメかなぁ・・・・面接とかあるのかしら？」

少しだけ不安になるあたし・・それでも、

ルーシィ
「魔導士ギルド、妖精（フェアリー）の尻尾（テイル）、最高にかっこいいなぁ。」

絶対にこのギルドに入る！っと、あたしが決心をしていると後ろの茂みから、

火竜（サラマンダー）
「へぇー・・・・君・・妖精（フェアリー）の尻尾（テイル）に入りたいんだー。」ガサッ

ルーシィ
「！！！」

後ろの茂みから人が現れた。

ルーシィ
「サ・・・・火竜（サラマンダー）！！？」

そう、さっきのいけすかない男が現れた。

火竜（サラマンダー）
「いや～探したよ・・・・・・君のような美しい女性をぜひ我が船上パーティに招待したくてね。」

ルーシィ
「は・・はぁっ！！？」

いきなり出てきて何いってんのよこの男は！！！・・まさか馬鹿？

ルーシィ
「言っておくけどあたしには魅了(チャーム)は効かないわよ。魅力(チャーム)の弱点は『理解』・・それは知ってる人には魔法は効かない。」

一応あたしはこの男には警戒をしておく。

火竜(サラマンダー)
「やっぱりね！　目が合った瞬間魔導士だと思ったよ。いいんだ、パーティにさえ来てくれれば。」

あたしの態度に構えることなく火竜(サラマンダー)はおしゃべりを続ける・・てい
うか、何言ってるのこの男は、あたしがそれでついて行くとでも
思ってるのかしら？

ルーシィ
「行く訳ないでしょ！　アンタみたいなえげつない男のパーティ
ーなんて」

火竜(サラマンダー)
「えげつない？　僕が？」

ルーシィ
「魅力(チャーム)よ、そこまでして騒がれたい訳？」

火竜(サラマンダー)
「あんなのただのセレモニーじゃないか。僕はパーティーの間セ

レブな気分でいたいだけさ。」

・・・・ただの馬鹿丸出しの男ね。

ルーシィ

「有名な魔導士とは思えないおバカさんね。」スタスタ

あたしが歩き出すと男は、

火竜（サラマンダー）

「待ってよ！」

男が引き止めてきたがこの場に及んで何をするの？と思ったのに、男は次の瞬間にあたしは信じられないセリフを耳にした。

火竜（サラマンダー）

「君・・・・妖精（フェアリー）の尻尾（テイル）に入りたいんだろ？」

ルーシィ

「！」ピタッ

あたしが思わず立ち止まり男の方を振り向くと男は続けて、

火竜（サラマンダー）
「妖精の《フェアリー》尻尾（テイル）の火竜（サラマンダー）って・・・・聞いた事ない？

ルーシィ
「・・ある！！！　あんた妖精の《フェアリー》尻尾（テイル）の魔導士だったの！！？」

火竜（サラマンダー）
「そうだよ。入りたいならマスターに話を通してあげるよ。」

あたしが聞くと、男はあのキメ顔で答えた・・これはもうパーティに行くしかないわ！！

ルーシィ
「素敵なパーティになりそうねっ？」ずももも・・・

火竜（サラマンダー）
「わ・・・・わかりやすい性格してるね・・君・・・・・。」

ルーシィ
「ほ・・本当にあたし妖精（フェアリー）の尻尾（テイル）に入れるの！！？」

憧れのギルドに入れると知ってあたしは嬉しかった。しかもあの有名な人物だったなんて・・ナツの色紙貰っとけばよかったな～。

火竜（サラマンダー）
「もちろん。そのかわり魅力（チャーム）の事は黙っといてね。」

ルーシィ
「はい、はーい？」

火竜（サラマンダー）
「それじゃパーティで会おう。」

ルーシィ
「了解であります？・・・・・は！！！擬似（ぎじ）魅力（チャーム）してたわ！！！」

でもこれであたしの念願が叶った！あたし妖精（フェアリー）の尻尾（テイル）に入れるんだー！！！

ルーシィ
「入るまではあのバカ男に愛想よくしとかないとね。」ししし・・・

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　ルーシィ

～Ｓｉｄｅ　カク

ナツ
「ぷはぁー！　食った食った！！」

ハッピー
「あい。」

カク
「まさか昼飯にあれだけ食べたのに夕飯も同じ位食べるとはの・・・・底無しか？」

ワシとナツ達は昼飯を食べ終えた後に別々に行動していたのじゃが、街をぶらついているとナツがお腹を空かせて倒れていたんじゃ。仕方なくまたあのレストランに行き夕飯を食べ終えて、食後の散歩をしている。
ワシらが今いる場所は街が見渡せるところに位置する高台じゃ。

ハッピー
「そいや火竜（サラマンダー）が船上パーティーやるって、あの船かなぁ。」

ナツ
「うぷ・・気持ちワリ・・。」

カク
「・・何でナツは酔っとるんじゃ・・。」

ハッピー
「想像したしただけで酔うのやめようよ・・・・。」

ワシとハッピーがナツに呆れていると近くにいた女性2人が何かを話している。

女1
「見て見て～！！　あの船よ火竜(サラマンダー)様の船～。あ～ん、私もパーティー行きたかったぁ。」

女2
「火竜(サラマンダー)？」

もう一人の女性が隣の女性に聞き返す。そして質問された女性は聞かれた女性にこう答えた。

女1
「知らないの？　今この街に来てるすごい魔導士なのよ・・・・・あの有名な妖精(フェアリー)の尻尾(テイル)の魔導士なんだって。」

あの女性は確かに言った・・・・妖精(フェアリー)の尻尾(テイル)の魔導士の火竜(サラマンダー)と。

ナツ&ハッピー&カク
「「「「！！！」」」」ピーン

・・・・ああ、そういえば原作ではそうじゃったの。

ナツ
「妖精の尻尾(フェアリーテイル)？」

ナツは呟きながら疑問譜を浮かべていた・・そして船の方を数秒見てから、

ナツ&カク
「・・うぷ・・・・・・・・・「妖精の尻尾(フェアリーテイル)・・」」

ナツはまた船酔いでうずくまってしまったがワシと同じ様に疑問をいだいておる。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　カク

～Ｓｉｄｅ　ルーシィ

火竜(サラマンダー)
「ルーシィか・・・・・・・・・いい名前だね。」

ルーシィ
「どぉも。」ニッコニッコ

あたしは今、約束通り火竜（サラマンダー）のパーティーに来ている。ドレスに身を包んでいるから少しは可愛く見える筈。

火竜（サラマンダー）
「まずはワインで乾杯といこう。」

そういって火竜（サラマンダー）はあたしのグラスにワインを注いでくれる。

ルーシィ
「他の女の子たち放っておいていいの？」

火竜（サラマンダー）
「いーのいーの。今は君と飲みたい気分なんだよね。」パチン

そう、今ここにいるのは、あたしと火竜（サラマンダー）の二人だけ。他の女の子達は外で話をしているらしい。
火竜（サラマンダー）が軽く笑い指をはじくと、ワインが粒状になり数粒空中に浮かび上がる。

火竜（サラマンダー）

「口をあけてごらん。ゆっくりと葡萄酒の宝石が入ってくるよ。」

ルーシィ
「（うざーーーーっ！！！・・・・でもここはガマンよ！！ガマンガマン！！）」

そう思いながらあたしは口を開ける。でもワインの粒が口に入りかけると、そのワインの粒から微量にだが妙な匂いが鼻についた。

ルーシィ
「！」

あたしはおもわず立ち上がり口の近くにあったワインの粒を手で弾く。

火竜（サラマンダー）
「！」

ルーシィ
「これはどういうつもりかしら？・・睡眠薬よね。」

そう、あたしが感じた違和感は恐らくだが睡眠薬の類（たぐい）がワインに入っていたからだ。

火竜（サラマンダー）
「ほっほーう・・よくわったね。」
ルーシィ
「勘違いしないでよね。あたしは妖精の尻尾（フェアリーテイル）には入りたいけどアンタの女になる気はないのよ。」

あたしがそう言うと目の前の男は急に態度を変えて、雰囲気も変わった。

火竜（サラマンダー）
「しょうがない娘だなぁ。素直に眠っていれば痛い目みずに済んだのに・・。」にたぁ
ルーシィ
「え？」

あたしが疑問に思っていると後ろから両腕を掴まれてしまった。

ルーシィ
「！！？」

そして後ろのカーテンが開くと両腕を拘束される。振り向けばそこには人相の悪い男が何十人も出てきた。

子分1
「おーーさすが火竜(サラマンダー)さん。」

子分2
「こりゃ久々の上玉だなぁ。」

ルーシィ
「な、何なのよコレ！！！　アンタたち何！！？」

あたしは叫びながら抵抗するが腕の拘束は簡単には外れない。すると火竜(サラマンダー)はあたしのあごを掴み自分の方へ向けた。

ルーシィ
「！！！」

火竜(サラマンダー)
「ようこそ、我が奴隷船へ。他国(ボスコ)に着くまでおとなしくしていてもらうよ、お嬢さん。」

ルーシィ
「えっ！！？・・ボスコ・・・・ってちょっと・・・・！！！妖精の尻尾(フェアリーテイル)は！！？」

あたしは動揺しながら確認をすると、こいつは開き直ったかのように言い出した。

火竜（サラマンダー）
「言ったろ？　奴隷船だと・・はじめから商品にするつもりで君を連れ込んだんだ。あきらめなよ。」

そいつは悪びれずそう言った。

ルーシィ
「そんな・・！！！・・・・・・・・・！！！」

あたしが何も言えず呆然としていると、周りの男達が口々に話し出した。

子分1
「へへっ、火竜（サラマンダー）さんも考えたよな。魅了（チャーム）にかかってる女どもは自（みずか）らケツをふって商品になる。」

子分2
「この姉ちゃんは魅了（チャーム）がきかねぇみてぇだし・・・・少し調教が必要だな。」

子分3
「へっへっへっ」

あたしは後ろから聞こえてくる男達の声にただ怯えるしかできなかった。

ルーシィ
「（や・・・・やだ・・・・うそでしょ・・・・・・・なんなのよ
コイツ・・・！！　こんな事をする奴が・・・・・）」

火竜（サラマンダー）はあたしの右太ももに手を伸ばし、門（ゲート）の鍵を奪った。

火竜（サラマンダー）
「ふーん。門（ゲート）の鍵・・・・星霊魔導士か」

男がつぶやくと、周りの男達も口々に質問をしていた。でも、あたしの耳には入らない。

火竜（サラマンダー）
「この魔法は契約者以外は使えん・・・つまり僕には必要ないって事さ。」ポイ

男はそう言って鍵を窓から投げ捨ててしまった・・チクショウ！
コレであたしは何もできないただの女の子だけど、

ルーシィ
「（これが、フェアリーテイルの魔導士か！！！）」

あたしの憧れていたギルドがこんなにも最低な奴等がいた事に怒りで震えるのが精一杯だった。目から涙を流し、歯を食いしばって火竜（サラマンダー）を睨むけど拘束は外れない。

火竜（サラマンダー）
「まずは奴隷の烙印を押させてもらうよ。ちょっと熱いけどガマンしてね。」

男はそういって奴隷の烙印が彫り込んである鉄の棒をあたしに押し付けようとしてくる。でも、あたしはそんな事よりも、

ルーシィ
「（魔法を悪用して・・・・人を騙して・・・・奴隷商ですって！！？）・・・・最低の魔導士じゃない。」

あたしがそんな事を口にしていると横にある『ドアの無い壁』が開きだした。

カク
「ワシもルーシィに同感じゃの。」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　ルーシィ

～Ｓｉｄｅ　カク

カク
「（どうやら間に合ったかの。）ワシもルーシィに同感じゃの。」

バキッ！！

その瞬間に『天井』には穴が空き、『ドアの無い壁』がまるでドアが有ったかのように開き、

ズシィンッ！！

因みに振ってきたのはマフラーをした男の子・・・・ナツ。壁から出てきたのは・・・・ワシじゃ。そう、ワシらは変な所からルーシィを助けにこの船に乗り込んだ。

火竜（サラマンダー）
「ひ・・昼間のガキ！！？・・・・それにあの時の変な男！！？」

ルーシィ
「ナツ！！？カクさん！！？」

火竜（サラマンダー）は驚いたのかルーシィから離れている。ルーシィはさっきの衝撃のお陰で拘束から外れた手で涙をぬぐう・・しかし、

ナツ
「おぷ・・駄目だ、やっぱ無理。」

ルーシィ
「えーーーっ！！？　かっこわるーーっ！！！」

カク
「何でお主は着いてきたのか全く分からんの。」

ナツは壁に倒れ掛かってしまい酔ってしまったようじゃ。お主はルーシィを助けに来たのかボケをかましにココまで来たのか分からん。

火竜（サラマンダー）
「な・・何だコリャ一体（いったい）・・・・！！？　何で空からガキが降ってきたり壁から人が出てくるんだ！！？」

子分2
「しかもこいつ酔ってるし。」

ナツ
「おおおおおおぉぉぉぉぉぉぉ。」

カク
「はぁ、これならワシが1人で片付けた方が良かったかの・・・・・。」

ワシが1人で後悔をしているとナツが落ちてきた穴からハッピーが顔を出してきた。

ハッピー
「ルーシィ、何してるの？」

ルーシィ
「ハッピー！！？　騙されたのよ！！！　妖精の尻尾（フェアリーテイル）に入れてくれるって・・それで・・あたし・・・・。」

ルーシィがありのままの事を伝えると、ナツが『ピクッ』と動いた。

ルーシィ
「てか・・アンタ羽なんてあったっけ？」

カク
「細かい事は後にせんか？　ルーシィ。」

ハッピー
「カクの言う通りだね・・逃げよ。」ピューーーギュウウウウン

ハッピーはルーシィの腰に尻尾を回してナツの開けた穴から飛んで行ったのだが、まだナツとワシが船に残っていた。

ルーシィ
「わっ・・ちょ・・2人はどーすんの!!?」

ハッピー
「オイラ1人しか運べないし・・何とかなるよ。」

ルーシィ
「あら・・」

火竜（サラマンダー）
「逃がすかぁっ!!!!!」ボマッ!ゴーーォン!

火竜（サラマンダー）の攻撃はギリギリの所で避けられたらしく、子分達にルーシィを評議員に通報される前に捕まえろと言っているようじゃ・・・・・意外とハッピーは薄情者じゃの。
暫くして銃の音が止んだと同時にナツがなにかを喋り出した。

ナツ
「フェア・・リィ・・・・テイル・・・・おま・・え・・が・・・。」

火竜（サラマンダー）
「あ?」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　カク

～Ｓｉｄｅ　ルーシィ

今あたしはハッピーに掴まれて飛んでいるのだが、さっきあたしの腕を掴んでいた男達があたし達に銃を発砲してきた。

ハッピー
「ルーシィ聞いて。」

ルーシィ
「何よこんな時に！！」

ハッピー
「変身解けた。」

この猫は一体何を言っているのかしら！？　空中で飛んでいられる為の羽がこのタイミングで解けちゃったの！？　あたしは思わず。

ルーシィ
「くそネコーー！！！」

と大声で叫んでいた。もちろんあたしとハッピーはそのまま海に真っ逆さまに落ちました。

ルーシィ
「（あんなのが妖精（フェアリー）の尻尾（テイル）だったなんて・・いや・・・・それより女の子たちをたすけないと。）」

あたしは海に落ちた自分の『門（ゲート）の鍵』を探していた。

ルーシィ
「（あった！！！　浅いトコでひっかかっててくれた？）」

あたしはひとまず水面にでて『門（ゲート）の鍵』を片手に握りしめた。

ルーシィ
「ぷはっ！！！　いくわよ・・・・開け！！宝瓶宮（ほうへいきゅう）の扉！！！
アクエリアス！！！」

あたしが手に持っている鍵は『黄道十二門（おうどうじゅうにもん）』の一つなんだけど・・・・こいつかなりのワガママなのよね～。まあ、その分強力だから良しとしとこう。

ハッピー
「すげぇーー！！！」

ルーシィ
「あたしは星霊魔導士(せいれいどうし)よ。門(ゲート)の鍵を使って異界の星霊たちをよべるの・・さあアクエリアス！あなたの力で船を岸まで押し戻して！！」

アクエリアス
「ちっ。」

ルーシィ
「今『ちっ』って言ったかしらアンター！！！　ねぇ？」

ハッピー
「そんなトコにくいつかなくていいよぉー。」

なんて生意気な星霊なのかしら！？ホントにイライラさせるのが得意な奴よこいつは。

アクエリアス
「うるさい小娘だ・・・・一つ言っておく、今度鍵落としたら殺す。」ゴゴゴゴゴッ！！！

あ、なんだかものすごく怒ってるように感じるんですけど・・。

ルーシィ
「ご・・めんなさい・・・・。」

あたしが謝ると同時にアクエリアスはあたし達と船を岸まで押し戻そうと大きな波をおこした。分かっていると思うけどあたし達はアクエリアスの真横にさっきまでいた。

ルーシィ
「あたしまで一緒に流さないでよォォォッ！！！」

そうしてあたしとハッピーは岸まで押し戻された船の甲板なや打ち上げられていた。

ルーシィ
「あんた何考えてんのよ！！！　普通あたしまで流す！！？」ムキー！！！

アクエリアス
「不覚・・・・ついでに船までながしてしまった。」

ルーシィ
「あたしを狙ったのかー！！！」

なんて危険な星霊なの！！？・・・・なんだかあたし命の危機だ

ったみたいです。

アクエリアス
「しばらく呼ぶな。一週間彼氏と旅行に行く・・彼氏とな。」スウッ

ルーシィ
「2回言うなっ！！！　なーんて勝手な奴なのかしら！！！」

ハッピー
「あまり関係良好じゃないんだね。」

ルーシィ
「でもやったわ！！　この騒ぎを聞きつけて軍の人達が来たら女の子達もかすかるわね・・・・あたしって」

あたしが自分だけの世界に入り込んでいると、後ろにいたハッピーがナツとカクさんを置いてきたのを思い出したらしく船の中へ入って行った。
あたしもハッピーを追いかけなくっちゃね。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　ルーシィ

～Ｓｉｄｅ　カク

カク
「（ふむ、そろそろアクエリアスの横波が来る頃かの・・）それでは皆さん！」
火竜（サラマンダー）
「んっ？」
子分達
「なんだ？」

ワシは近くにあった窓の外を見ながらタイミングを計りながら一言だけ言った。

カク
「急な横波に・・ご注意を。」ペコリ

ザッ！！！！　ザアアアアアアアア！！！！！

ワシが言い終わると同時に船は大きく傾きながら岸まで押し戻された・・・途中で外からルーシィの叫び声が聞こえたのは気にせんでおこうかの。
そして完全に船が止まったところで、火竜（サラマンダー）は慌てているようじゃ。
ナツが元に戻ったのか、さっきよりもだいぶ顔色が良くなっている。

ナツ
「止まった・・揺れが・・止まった。」
カク
「そのようじゃの。」

ナツは少しふらつきながら立ち上がりワシと一緒に、火竜(サラマンダー)達を睨んでいるとルーシィが心配そうに入って来た。じゃがワシらの雰囲気で言葉が途中で終わり少し驚いておるようじゃ。

ナツ
「・・・・・」オオオオオオ
カク
「・・・・・」ゴゴゴゴゴゴ

よく見ればナツも戦闘体制になっていて、いつもの『闘う』表情になっておる。

火竜(サラマンダー)
「小僧・・それに昼間の長っ鼻・・人の船に勝手に乗ってきちゃイカンだろぉ・・あ?」

火竜(サラマンダー)が頬を掻きながらワシらに言ってくる・・・・今こいつワシ

の『鼻(タブー)』に触れたの・・よし殺しても構わんぞナツ♪
ナツは上着を脱いで両肩を出した格好になったので、ワシは・・・
・特に無し！！！

火竜(サラマンダー)
「オイ！！　こいつ等をさっさとつまみ出せ。」

子分1～4
「「「「はっ！！」」」」

火竜(サラマンダー)の指示でナツには2人、ワシにも2人此方に向かってくる。

ルーシィ
「いけない！！！　ここはあt「大丈夫」！」

ハッピー
「いいそびれたけどナツもカクも魔導士だから。」

ルーシィ
「えっーーーーっ！！？」

恐らくじゃが、ルーシィが星霊をだそうと鍵を手なやするが、ハッピーがそれを止めさせた。・・・・リアクションが素晴らしいの。
ワシがそんな（マヌケな）事を考えていたら男達はワシらに近づいてくる・・・・ナツのセリフにかぶるかの。

ナツ&カク
「「おまえが（お主が）妖精（フェアリー）の尻尾（テイル）の魔導士か（魔導士かの）。」
」

ナツとワシが火竜（サラマンダー）に聞く。

火竜（サラマンダー）
「それがどうした！？」

ナツ&カク
「よぉく（黙って）ツラ（顔を）見せろ（見せんかい）。」

ワシらが言い終わると同時に2人の男がワシらに殴りかかってきたのだが、

ゴンッ！　ギンッ！

ナツは2人を片手で簡単に弾き飛ばしながら・・ワシは覇王色の覇気で2人を威圧をして足元に気絶させ、

ナツ&カク
「オレは（ワシは）妖精（フェアリー）の尻尾（テイル）のナツだ（カクじゃ）！！！おめ

ぇなんか（お主など）見たことねぇ（見た事が無いのぅ）！！！！」

火竜（サラマンダー）
「なっ！！！！」

ルーシィ
「え？」

ワシらが自己紹介（？）をすると火竜（サラマンダー）は驚きルーシィが唖然としていた。

ルーシィ
「妖精の尻尾（フェアリーテイル）　！！？ナツとカクさんが妖精の尻尾（フェアリーテイル）の魔導士！！？」

かなり驚いたのだろうか、ルーシィはまだ口を大きくあけて叫んでおるが・・・・なんじゃかはしたないのぅ、ルーシィ。

子分5
「な・・・・！！！　あの紋章！！！」

子分6
「本物だぜボラさん！！！」

『火竜（サラマンダー）』から『ボラ』
「バ・・バカ！！！　その名で呼ぶな！！！」

『火竜(サラマンダー)』は『ボラ』という奴じゃったらしいの・・・・つまり嘘をついておったのか。

ハッピー
「ボラ・・紅天(プロミネンス)のボラ・・・・数年前に『巨人の鼻(たいたんノーズ)』っていう魔導士ギルドから追放された奴だね。」

ルーシィ
「聞いた事ある・・魔法で盗みわ繰り返してて追放されたって。」

カク
「・・簡単に言えば『火の魔法が使えるが卑怯者でクソメン』じゃの。」

ハッピーがボラの情報を伝えるとルーシィが更に詳しい情報を伝えた・・・・そしてワシが話の腰を折り終わったところでナツが、

ナツ
「おめぇが悪党だろうが善人だろうが知ったことじゃねぇが妖精(フェア)の尻尾(リーテイル)を騙るのはゆるさねェ」オオオオ

ナツは歯を食いしばり怒りを必死に溜めている。ワシもそれに便乗したのだが・・

カク
「確かにナツの言う通りお主は許せないの・・んっ？いやまてナツ。　『悪人だろうが善人だろうが知った事じゃねェが』って善人は別に構わんじゃないんか！？」

ワシは『ボケ』をしたのか分からんがナツに『ツッコミ』をいれていると、痺れを切らせたのかボラが攻撃をしてきた。

ボラ
「ええいっ！！！　ゴチャゴチャうるせえ奴等だ！！！！」ボグゥオ！！

そう言ってボラは炎をワシとナツにむかった放った。

ルーシィ
「ナツ！！！　カクさん！！！！」

ルーシィが動き出そうとするがハッピーが止めた。ワシは避けなくても平気なのじゃが剃（ソル）を使いボラ達の後ろから気づかれないように観察をしていた。

ボラ
「フンっ！」

ボラが鼻で笑っておるのだがワシは避けたから平気で、ナツも実際のところ無傷なのじゃがの・・・・それがきっとお主の最後のキメ顔じゃの。

ナツ
「まずい。」ゴォォォォォォ

カク
「おそい。」

ナツが呟きながら火を食べている。ワシが後ろから声を掛けてボラ達を後ろを向かせた後に、ボラ達の目の前で消えてルーシィの横に移動した。

ナツ
「何だコレぁ。おまえ本当に火の魔導士か？　こんなまずい？火？は初めてだ。」もぐもぐがぶっもぐもぐ

カク
「じゃからあの時言ったじゃろう・・『そんなに強くは無い』・・とな。」

ボラ
「・・・・・・・！！！！！」

ルーシィ
「はァ！！！？」

ボラとルーシィ、そしてボラの子分達は目の前で起きた事に驚く事しかできないらしい。

ナツ
「ふーーーごちそう様でした。」ゴオオオ

そしてナツは自分が受けた？火？を全て食べきった。

ボラ
「な・・なな・・何だコイツはーーーっ！！！？」

子分達
「火・・・・！！？　火を食っただと！！？」

ハッピー
「ナツには火は効かないよ。」

ハッピーが口を挟んで喋ったが・・・・誰もワシには突っ込まないようじゃの。

ルーシィ

「こんな魔法見た事ない！！！　っていうよりカクさんも何したんですか！！？」

カク
「んっ？　ワシはただ単にきた攻撃を避けただけじゃがの。」

ワシとルーシィのちょっと楽しいお話をしているとナツが魔力を高めているようじゃ。

ナツ
「食ったら力が湧いてきた！！！・・いっくぞぉぉぉぉっ！！！！」

子分1
「こいつ・・まさか・・ボラさん！！！　オレぁコイツ見た事があるぞ！！！　「はぁ！！？」　桜色の髪に鱗みてェなマフラー・・間違いねェ！！！コイツが・・・・・・本物の・・」

ドゴゴゴォォォォォォ！！！！

しかし1人の男がボラに伝えるよりも早くナツの魔法が奴等にくらった・・・・そしてその姿はまるで、

ルーシィ
「火竜（サラマンダー）・・」

カク
「成る程のぅ・・確かに『アレ』は火竜(サラマンダー)じゃな。」

そしてナツは目の前にいるボラに狙いをつけて、

ナツ
「よーく覚えておけよ。これが妖精(フェアリー)の尻尾(テイル)の・・・・・・・・魔導士だ!!!!」ゴッ

ナツはそう言いながらボラの頭を『火を纏った』拳で床に叩きつけた。そしてここからハッピーがメインの解説を始めようかの。

ルーシィ
「火を食べたり火で殴ったり・・本当にこれ・・・・魔法なの!!?」

ハッピー
「竜の肺は焔を吹き竜の鱗は焔を溶かし竜の爪は焔を纏う・・これは自らの体を竜の体質へと変化させる『太古の魔法(エンシェントスペル)』・・」

ルーシィ
「なにそれ!!?」

カク
「元々は龍迎撃用の魔法らしいんじゃよ。」

ルーシィ
「・・・・・・・・・・・・・・・あらま。」

ハッピー&カク
「「滅竜魔法(ドラゴンズレイヤー)！！！　イグニールがナツに教えたんだ。（教えた魔法じゃ。）」」

そんな事を言っておるとナツは誰かを壁ごと外に蹴り飛ばして出ていってしまった。

ルーシィ
「竜が竜たいじの魔法教えるってのも変な話ね。」

ハッピー
「」ぐわばっ！！

ルーシィ
「疑問に思っていなかったのね・・・・滅竜魔法(ドラゴンズレイヤー)・・すごい・・すごい・・けど、やりすぎよォォォッ！！！！」

船の外を見るとナツが敵を倒しながら丸太を持って振り回しておる・・・・いや、『街を壊しながら』が抜けておったかの。

ハッピー
「あい。」

ルーシィ
「『あい』じゃないっ！！！」

しばらくすると鎧を身に纏った軍隊が此方にやって来たようじゃ・・・・まずい！！！

カク
「ナツ！！　軍隊が大勢来おったぞ！！」

ナツ
「やべ！！！　逃げんぞ。」

ルーシィ
「！！！　何であたしまでーー！！！？」

ワシがナツに声をかけるとナツはルーシィの手を引っ張りながら走っている。

ナツ
「何故と言われても・・妖精の尻尾（フェアリーテイル）に入りたくないのか？」

ワシの言った事にルーシィが驚いて『キョトン』としていると、手を引っ張っているナツが

ナツ
「妖精の尻尾（オレたちのギルド）入りてんだろ？　来いよ。」
ルーシィ
「うん！！！」

こうしてワシらは軍隊から逃げ切った後ワシらのギルドへと帰って行った。もちろん帰りも列車に乗ったからナツは酔ってしまったのはお約束。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　カク

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　？？？

？？？1
「ま～た妖精の尻尾（フェアリーテイル）のバカ共がやらかいおった！！！　今度は港半壊ですぞ！！！　信じられますかな！？」
？？？2
「いつか街一つ消えてもおかしくない！！！」
？？？3
「演技でもない事言わんでくれ・・・・本当にやりそうじゃ。」

???4
「罪人ボラの検挙の為と政府には報告しておきましたがね。」
???3
「いやはや・・」
???5
「オレはああゆうバカ共結構好きだけどな。」
???1
「貴様は黙っとれ!!!」
???4
「確かにバカ共じゃが有能な人材が多いのもまた事実。」
???6
「だからこそ思案に余る。」
???7
「痛し痒しとはこの事ですな。」
???5
「放っておきゃいーんすよ。」
???1
「何だと貴様!!!」
???5
「あんなバカたちがいないと・・この世界は面白くない。」

Side Out ???

第００１．０話　妖精の尻尾・・・後編（後書き）

今回の話はなんだか長かった・・・・そんな気がする天翔る堕天使です。

早く話を進めたいのですが、思う様にいかないのが現実です。（；´Д`）

ではまた次回！

ｂｙ天翔る堕天使より。

第002．0話　総長あらわる！・・・・前半

～Ｓｉｄｅ　カク

ルーシィ
「わぁ・・大っきいね。」

ハッピー
「ようこそ妖精の尻尾（フェアリーテイル）へ。」

ハッピーが飛び上がりながら言うのでワシもこのギルドの気をつけておく事をルーシィに囁いた。

カク
「入ったらすぐ正面にあるカウンターに行く事をワシは進める。」
ボソッ

忘れているかもしれないがナツはあの『モブ出っ歯』の情報でハルジオンの街に行ったのじゃが、実際のところは勘違いでありナツが火竜（サラマンダー）と他の街から呼ばれていたそうじゃ。
ナツはきっとその『モブ出っ歯』を見つけたら何かしらのアクションをするじゃろう。

ルーシィ

「？　はい、分かりました・・？」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　カク

～Ｓｉｄｅ　ギルド内

ギルドの中はいつもと変わらず騒がしいようだ。

モブ１
「ミラちゃーん！！　こっちビール３つお願い！！」

ミラ
「はいはーい。」

今返事をした従業員が妖精（フェアリー）の尻尾（テイル）の看板娘でもありグラビアでもある『ミラジェーン』。
そしてカクの彼女でもある。ギルドのメンバーは特に反対はしなかったが、何人かは羨ましがっていた。

ワカバ
「ミラちゃ～ん」

ミラ
「はいはい何かしら？」

ワカバはそう言ってミラを自分の方に振り向かせると、煙魔法で複数のハートマークを煙で作った。

ワカバ
「今度オレとデートしてよぉ。」ポわわ～ん

モブ2
「あ！ズリィ抜けがけすんなよ。」

ミラ
「もぉ・・。」

ばっ！ばばっ！ばっ！

ワカバがミラに言うとミラは自分の得意な変身魔法を使った。

ミラ
「あなた奥さんいるでしょ？」ぽんっ

ワカバ
「どわーーっ！！　うちの嫁なんかに変身するなよォ！！！」

一同
「「「「あはははっ。」」」」

ミラ
「あ」ぽわっ

ミラがワカバの誘いを上手く流した後に、入り口にいた人影に気がついたのか変身魔法を解いた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　ギルド内

～Ｓｉｄｅ　カク

ミラ
「あ」ぽわっ

ナツ
「ただいまーっ！！！！！」くわっ

ハッピー
「ただー。」

カク
「ただいま・・・・ハッピー、最後までちゃんと言わないのか？」

ナツがあの『モブ出っ歯』を見つけたらしく全力で扉をあけて中に入って行ったの・・・・『モブ出っ歯』は逃げるんじゃ！！

ミラ
「ナツ、ハッピーおかえりなさい。」

モブ出っ歯
「またハデにやらかしたなぁハルジオンの港の件・・・・新聞に載・・・・・・・・て。」

ナツ
「てめぇ！！！　火竜（サラマンダー）の情報ウソじゃねェかっ！！！」バキャ

モブ出っ歯
「うごっ。」

『モブ出っ歯』が喋っている最中にナツは『モブ出っ歯』の顔面を蹴り飛ばした。当たり前だが机も一緒に蹴り飛ばした。

ミラ
「あら・・・・ナツが帰ってくるとさっそくお店が壊れそうね・・うふふ。」

ワカバ
「壊れてるよーー！！！」

ナツがモブ出っ歯を蹴り飛ばした為なのかハッピーも別の所へ飛んで行った・・・・段々じゃが『喧嘩』の波紋が拡がっている。

カク
「・・・・マズイの。」

ルーシィ
「すごい・・あたし本当に・・妖精(フェアリー)の尻尾(テイル)に来たんだぁ。」

ルーシィは後ろで歓喜の声を漏らしていた・・・・ルーシィ、目の前の状況を良く見た方がいいぞ。これから酷くなっていく前に何とか進もうかの。

ダッダッダッダッダッ！

グレイ
「ナツが帰ってきたってぇ！！？　てめェ・・・・この間の決着(ケリ)つけんぞ！！！」ずんっ

ルーシィ
「！！！」

彼は『グレイ・フルバスター』。グレイの癖は変態的であるがギ

ルドのメンバーはほぼ慣れたらしいが・・因みに癖は『服を脱ぐ』事。
そしてグレイは今パンツ1枚ルーシィの前に立っておる。

カナ
「グレイ・・・・あんた何て格好で出歩いてるのよ。」

ルーシィ
「・・・・・・」

グレイ
「はっ!!! しまった!!!」

カク
「流石じゃの『変態グレイ』。しかしパンツ1枚で歩くとは前よりは成長したの。」

もちろんグレイは癖で服を脱いでおるから悪気は全く無い。最初の頃は全裸で街を歩いておったから軽くお灸を据えておいた。

カナ
「これだから品のないここの男どもは・・・・・・イヤだわ。」
がぶっ

ごくごくごきゅごきゅごくんごきゅっごぼっ

カク
「・・カナ、お主も樽で飲んでる時点で品の欠片も無いんじゃが。」
ルーシィ
「・・・・・・・」

彼女は『カナ・アルベローナ』。見た目とは裏腹にかなりの大酒飲みらしく『妖精の尻尾(フェアリーテイル)』の年間のお酒消費量の3割は彼女のお腹に入るらしい。
そしてお酒を飲む時は樽で飲む方が多いらしい。

グレイ
「オオゥ!!!　ナツゥ!!!　勝負せェや!!!」
ナツ
「服着てから来いよ。」
エルフマン
「くだらん。」ゴゴゴゴゴゴ
ルーシィ
「!」

ルーシィの後ろに立っている男は『エルフマン・ストラウス』。
右目の下に傷があり、学ランを着ている大男。実力は『妖精の尻尾(フェアリーテイル)』

でも上位に入るんじゃが、ここ一番で力が出せない。何かと『漢』を主張する暑苦しい性格じゃが情に厚く涙もろい。

エルフマン
「昼間っからピーピーギャーギャーガキじゃあるまいし・・漢なら拳で語れ！！！」

ルーシィ
「けっきょくケンカなのね・・・・」

ナツ＆グレイ
「邪魔だ！！！」どっごぉぉぉ！

ルーシィ
「しかも玉砕！！！」

ロキ
「ん？騒々しいな。」

ルーシィ
「あ！！『彼氏にしたい魔導士』上位ランカーのロキ！！」

彼は『ロキ』。眼鏡をかけた美青年で、『彼氏にしたい魔導士』ランキングの上位を常にキープしているが本人はかなりの女好きらしい。
正確には魔導士ではなく、その正体は黄道十二門の星霊の1人、獅子宮のレオである。この事を知っているのはワシぐらいじゃ。

ロキ
「まざってくるねー？」

女1
「がんばって～？」

ルーシィ
「（ハイ消えたっ！！！）な・・・・なによコレ・・・・まともな人が1人もいないじゃ・・・・」

ルーシィが悲しさのあまり床に倒れ込んだのを椅子に座って見ていたらミラがワシに声を掛けた。

ミラ
「カクもお帰りなさい・・あらぁ？カク、新入りさん？」

カク
「ああ、そうらしいんじゃがこのギルドの実態を知って落ち込んどるようじゃ。ルーシィ、顔をあげんか。」

ルーシィ
「はい・・えっ！！！！　ミ・・・・ミラジェーン！！！！」

ミラ
「こんにちは、新入りさん。」ニコッ

ミラが最高の笑顔でルーシィを迎えたのじゃが今はそれよりもルーシィは気になる事があるみたいじゃ。

ルーシィ
「キャー！！！　本物～？はっ・・ア・・アレ止めなくていいんですか！！？」

ミラ
「いつもの事だからぁ？放っておけばいいのよ。」

ルーシィ
「あらら・・・」

ルーシィがミラの発言に対して少し呆れていると、横から『お酒のビン』が勢い良くミラに飛んで来たのだが本人はまだ気づいていない。

ミラ
「それに・・・・「よっと。」キャッ！！！」

カク
「大丈夫かのミラ？怪我はないか？」

ミラ
「あ・・ありがとう・・・・カク、手が当たってる。／／／」ボソッ

カク
「！す、すまん！」

今のは『不可抗力』であるので決してワザとではないのでご注意を！流石にワシでも『時と場所』は考えている！・・・・後でちゃんと謝ろうかの。
そんな事を考えているとグレイがナツに殴り飛ばされてルーシィの方に飛ばされたのじゃが・・・・パンツは何故かナツが持っていた。

グレイ
「あーーーっ！！！　オレのパンツ！！！」

ルーシィ
「こっち向くなー！！！」

グレイ
「お嬢さんよかったらパンツを貸して・・「貸すかーーっ！！！」
」

グレイは相変わらずの変態じゃった。何でも良いから布でも腰に巻いておれ。

ロキ
「やれやれ・・・・デリカシーのない奴は困るよね。ところで君どこのモデル？」

ルーシィ
「なにコレ！！？」
エルフマン
「漢は拳でぇーーーーーーーーっ！！！」
ナツ
「邪魔だっての。」

皆が殴り合いの喧嘩がだんだん過激になっていき嫌な予感がしてきた。

カナ
「あーーうるさい。落ち着いて酒も呑めないじゃないの。あんたらいい加減に・・・・・・・しなさいよ・・・・」ピキィ
グレイ
「アッタマきた！！！」コォォォォ
エルフマン
「ぬおおおおおおっ！！！！！」ボグォォォォォ
ロキ
「困った奴等だ・・」キィィィン
ナツ
「かかって来いっ！！！！」ゴボォアァァ！！！！

カナはカードを片手に、グレイは手と手を合わせて、エルフマンは右腕を変化させ、ロキは指輪を、ナツは両手に火を纏いながら魔法を喧嘩につかおうとしようとしておる。

ルーシィ
「魔法！！！？」ぐもっ

ミラ
「これはちょっとマズイわね。」

ルーシィは目の前の事に驚きミラは少し冷や汗を流しておる。そしてワシは

カク
「あれ位ならワシ1人で大丈夫じゃろう・・・・問題はその後のアフターケアじゃの。」ニヤッ

ルーシィ
「何をするつもりなんですか！！？」

ワシが冗談で言ったつもりなのにルーシィは本気で驚いておる・・そんなにワシは今変な事を言った覚えはないんじゃがの。
そんな事をしているとギルドの入口で屋根につく程の大男が現れた・・マスターじゃった。

マカロフ
「そこまでじゃ・・・・やめんかバカタレ！！！！」

ルーシィ
「でかーーーーーーーっ！！！！」

マスターの怒りの声と、ルーシィが驚いた声がギルドに響き渡ると、

一同
「「「「「・・・・・・・」」」」」

ミラ
「あら・・・・いたんですか？総長（マスター）。」

ルーシィ
「マスター！！？」

ギルドの皆が一斉に静かになったがミラのマイペースな一言にルーシィが突っ込んだ。そしてほぼ全員がまるで何事もなかったかのように、

グレイ
「ちっ。」

エルフマン
「フンッ。」
ロキ
「びっくりしたねー。」
女1
「ねー？」
カナ
「酒。」

それぞれに動き出したのじゃが若干1名の様子が違ったようじゃ。

ナツ
「だーっはっはっはっはっ！！！　みんなしてビビリやがって！！！
この勝負はオレの勝ぴっ」

ズシンッ

ルーシィ
「！！！」
カク
「あー・・・・どんまいじゃの。」

ナツはマスターの足に踏み潰されてしまったのを見て驚いておる。
するとマスターがワシに、

マカロフ
「カク、居るんじゃったらお前の力で何とかならんのか？」

足元にいるナツの心配をよそに何故かワシに注意してきた。まず先に足をどかした方が良いぞ。

カク
「マスター、ワシには全員が『精神崩壊』か『生きてる事にトラウマを覚える』のどちらかで良いんじゃったら・・今度から止めるんじゃが。」ニコッ

一同
「「「「「「「・・・・・・っ！！！！」」」」」」」

ワシはマスターの問い掛けに正直に応えたんじゃが周りのメンバーが冷汗を流していた。

マカロフ
「それでも構わんから今度からは止めてくれ。」

マスターのまさかの返答にギルドのメンバーが焦っている。やろうと思えば出来るんじゃが、最悪の場合は『永遠の眠り』につくんじゃがの。

マカロフ
「む、新入りかね。」

ルーシィ
「は・・はい・・」

マスターはルーシィなは気付いたのか声を掛けるとルーシィは緊張してしまい震えておる。そんなに緊張する事ないんじゃがの。

マカロフ
「ふんぬぅぅぅ・・」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・プンプンプンプンプン

ルーシィ
「えぇーーーっ!!?」

先程まで屋根までの大きさだったのじゃがルーシィの膝ぐらいの大きさまで縮んでしまいルーシィは驚いたようじゃ。

マカロフ

「よろしくネ。とう！！」しゅばっ

ルーシィに挨拶をして、綺麗に回転しながら2階にある手すりに、

ゴチーン

一同

「「「「「「・・・・・・」」」」」」

マスターは頭を勢い良く後頭部をぶつけて少し悶えておる。暫くの沈黙してからマスターの説教が始まった。

マカロフ

「ま～たやってくれたのう貴様等・・見よ、評議会から送られてきたこの文書の量を。」

ルーシィ

「（評議会・・　・・魔導士ギルドを束ねてる機関じゃない。）」

マスターはそういって左手で高く掲げるのじゃが・・そんな事をせんでも見えるんじゃがの。

マカロフ

「まずは・・グレイ、密輸組織を検挙したまではいいが・・・・その後街を素っ裸でふらつき、挙句の果てに干してある下着を盗んで逃走。」

グレイ
「いや・・・・だって裸じゃマズイだろ。」

カク
「グレイ、今問題にしているのは『なぜ裸になるか』じゃ。」

ワシは出会ってから全く変わらないグレイに呆れとる。

マカロフ
「エルフマン！！　貴様は要人護衛の任務中に要人に暴行。」

エルフマン
「『男は学歴よ』なんて言うからつい・・・・」

カク
「そこは殴らなければ『漢』じゃたの、エルフマン。」

マスターはそのまま紙に書いてある内容を読み続けた。

マカロフ
「カナ・アルベローナ。経費と偽って某酒場で呑むこと大タル15個しかも請求先が評議会。」

カナ
「バレたか・・・・・・」
ロキ
「ロキ・・・・評議員レイジ老子の孫娘に手を出す。某タレント事務所からも損害買収の請求がきておる。」
カク
「流石じゃのロキ。」

ワシがメンバーのやった内容を他人事の様に聞いていると、マスターが深い溜息を吐いた。

マカロフ
「はぁ・・・・人事のようにしておるが、カク。お前もなんじゃ。」
カク
「何じゃと!?」

マスターの次の指名がワシに向いてしまった・・・なぜなんじゃ!!?　ワシが一体全体何をしたというんじゃ!!!
マカロフ
「２０個程の闇ギルドを壊滅させたのは良かったんじゃが・　・

その闇ギルドのマスターが全員何かに怯えており未だに事情聴取が全くとれておらんっ！！！」

カク
「・・・・・・あ、その事じゃったのか。」

ワシは別に謝る気は全くないんじゃ。先に相手のギルドが喧嘩を売ってきたからそれをワシが高く買っただけじゃからワシは悪くないはずじゃ。

マカロフ
「それにあちこちの地形を勝手に変えるんじゃないっ！！　地図の変更を一体あと何回すれば良いんじゃ！！」

カク
「別にワシは地形を変えたくて変えておる訳では無いんじゃがの。」

ワシは最後に付けたされた内容にも悪びれる必要も無い。あれは相手のギルドの建物が大きかったからキチンと平地にしただけじゃ。

マカロフ
「そしてナツ・・・・デボン盗賊一家を壊滅するも民家7軒も壊滅、チューリー村の歴史ある時計台の倒壊、フリージアの教会全焼、ルビナス城一部損壊、ナズナ渓谷観測所崩壊により機能停止、ハルジオンの港を半壊。」

ルーシィ
「（本で読んだ記事はほとんどナツだったのね・・）」

やはりナツは相変わらずの結果じゃの。多分じゃろうがギルドで1番の壊し屋じゃろう。

マカロフ
「アルザック、レヴィ、クロフ、リーダス、ウォーレン、ビスカ・・etc・・貴様等ァ・・ワシは評議員に怒られてばかりじゃぞぉ・・・・」ぷるぷるぷる

他のメンバーにもマスターは簡単に言っていく。その後マスターはプルプルと震えだし、ギルドの皆は怒られると思ったのか暗い顔をしてる。
ルーシィに至ってはその雰囲気で怯えておる。

マカロフ
「だが・・評議員などクソくらえじゃ！」ボッ

ルーシィ
「え？」

マスターはそういうと左手に持っていた評議員からの大量の紙をすべて燃やして下に投げる。それをナツが犬の様に口に咥えて食べ

始めた。
ルーシィはマスターの言った言葉に対して驚いておる。

マカロフ
「よいか・・理(ことわり)を超える力はすべての理(ことわり)の中より生まれる。魔法は奇跡の力なんかではない。我々の内にある‘‘気’’ の流れと自然界に流れる‘‘気’’ の波長があわさりはじめて具現化されるのじゃ。それは精神力集中力を使う・・いや己が魂すべてを注ぎ込む事が魔法なのじゃ。上から覗いている目ん玉気にしてたら魔道は進めん！」にん

そこまで言うと、マスターは我慢が出来なかったのかに顔がにやけてしまった。

マカロフ
「評議員のバカ共を恐れるな。自分の信じた道を進めェい！！！！！それが妖精(フェアリー)の尻尾(テイル)の魔導士じゃ！！！！」

マスターが言い切った瞬間にギルド内は皆の雄叫びで一気に盛り上がった・・・まぁさっきの事を気にしてるのは殆(ほと)んどおらんじゃろうな。
そして長い宴が始まった。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　カク

第００２．０話　総長あらわる！・・・前半（後書き）

最近前半後半にして投稿するからやたら面倒くさいです。（，Д、）ｙ┻・~~

区切り方とか本当に悩んでいますが、頑張っていきます。

ではまた次回！

ｂｙ天翔る堕天使より。

第００２．０話　総長あらわる！・・・・後半

～Ｓｉｄｅ　カク

モブ出っ歯
「じゃあナツが火竜（サラマンダー）って呼ばれてたのか！？　他の街では。」

モブ１
「確かにオメーの魔法はそんな言葉がぴったりだな。」

ナツが自分専用の‘‘火のメニュー’’を口いっぱいに頬張って食べているとギルドの仲間が口々に言うのじゃが・・・・あんまり旨そうじゃないの。ワシのサンドウィッチの方が旨そうじゃ。

ハッピー
「ナツが火竜（サラマンダー）ならオイラはネコマンダーでいいかなぁ。ねぇねぇ。」

ハッピーはギルドのメンバーからナツの別の呼び方が気に入ったのか、ハッピー自身も、それにのったのかの。

カク

「いいとは思うんじゃが・・・・マンダーって何なんじゃ。」モグモグ

ミラ
「ここでいいのね？」

ルーシィ
「はいっ！！！」

カク
「んっ？」ゴクン

後ろにあるカウンターから声がしたのでそっちを振り向くと、ミラがルーシィの右手にマークを入れてもらっておる。

ルーシィ
「カクさん！！！　ナツー！！！　妖精（フェアリー）の尻尾（テイル）のマーク入れてもらっちゃったぁ。」

カク
「おお、そうか。よかったのルーシィ。」

ナツ
「よかったなルイージ。」

ルーシィ
「ルーシィよ！！！！」

・・・・ナツ、女性の名前を間違えるのだけは危険じゃからよすんじゃ。

ワカバ
「おまえ等あんなカワイイ娘どこで見つけてきたんだよ。」

モブ1
「いいなぁ～うちのチーム入ってくんねえかなぁ。」

カク
「（じゃあ自分で探しに行けばよかろう。）街に行ったら偶然会っただけじゃ・・ワカバ、そういえばミラをデートに誘ったそうじゃないか。ん？」（^＿^）

ワカバ
「・・・・・」（・・・；）

カク
「人の彼女に手を出して・・覚悟は出来ておるのかのぅ？」

ワカバ
「すみませんでした！！！！」ｏｒｚ

実は先程の宴会でミラと話していたら隣にいたモブがその事を話してきた。ワシがワカバを脅しておるとナツが席から立ち上がった。

モブ2
「ナツ、どこ行くんだ？」
ナツ
「仕事だよ。金ねーし。」

相変わらずじゃのマイペースじゃのナツは。ワシは目の前にあるサンドウィッチを食べながらワカバにきつく言っておいた。
その後ワシはミラ達がいるカウンターの方へ移し始めた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　カク

～Ｓｉｄｅ　ナツ

ハッピー
「報酬がいいやつにしようね。」
ナツ
「そうだなよな・・お！コレなんかどうかな。『盗賊退治』で１６万Ｊだ！！」
ハッピー
「決まりだね。」

俺は目の前にある紙を取ってじっちゃんの所に行こうとしたらじっちゃんが誰かと話してんな・・子供？

？？？

「父ちゃんまだ帰ってこないの？」

ナツ

「！」

マカロフ

「む、くどいぞロメオ。貴様も魔導士の息子なら親父を信じておとなしく家で待っておれ。」

ロメオ

「だって・・・・3日で戻るって言ったのに・・・・もう1週間も帰って来ないんだよ・・・・」

マカロフ

「マカオの奴は確かハコベ山の仕事じゃったな。」

俺は目の前にいるマカオの子供とじっちゃんの話を黙って聞いていた・・なんかアイツの姿・・・・

ロメオ

「そんなに遠くないじゃないかっ！！！　探しに行ってくれよ！！！　心配なんだ！！！」

マカロフ
「冗談じゃない！！！　貴様の親父は魔導士じゃろ！！！　自分のケツもふけねェ魔導士なんぞこのギルドにはおらんのじゃあ！！！　帰ってミルクでも飲んでおれい！！！」

・・・・昔の俺みたいだな。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　ナツ

～Ｓｉｄｅ　カク

ワシは今マスターとロメオが話している隙にカウンターにいるミラとルーシィの方へ移動した。

マカロフ
「冗談じゃない！！！　貴様の親父は魔導士じゃろ！！！　自分のケツもふけねェ魔導士なんぞこのギルドにはおらんのじゃあ！！！　帰ってミルクでも飲んでおれい！！！」

ロメオ
「・・・・・・バカー！！！」ゴスッ

マカロフ
「おふ。」

カウンターに座っていたマスターはロメオに顔を殴られて変な声をあげた。ロメオはそのままギルドから走って立ち去った。

ルーシィ
「厳しいんですね。」

ミラ
「あんな風に言っても本当は総長(マスター)も心配してるのよ。」

カク
「甘やかすだけじゃ人は成長せんからの。むしろ潰してしまうだけじゃ。」

ズシ!!!

カク
「ん? なんじゃ。」

大きな音が響き渡りナツは無言でギルドから出て行きおった。

ナツ

「・・・・・」

ナブ
「オイイ！！　ナツ！！　依頼板壊（リクエストボード）すなよ！！」

ルーシィ
「え？」

ルーシィは今までの出来事で理解できなかったのかナツの行動に驚いてしまっておる。

ナブ
「総長（マスター）・・ナツのやつちょっとヤベエんじゃねぇの？」

因みにこの男『ナブ』はいつも依頼板の前をいつもうろうろしているだけで仕事は殆んどした事が無い。彼曰く『自分にしかできない仕事を探している』らしい。

モブ3
「アイツ・・・・マカオを助けに行く気だぜ。」

モブ4
「これだからガキはよォ・・・・・・・・・」

ナブ
「んな事したってマカオの自尊心がキズつくだけなのに。」

マカロフ
「進むべき道は誰が決めることでもねえ。放っておけぃ。」

と、マスターがパイプを吸いながら言い終わると誰も騒がなくなり静かになった。

ルーシィ
「ど・・・・どうしちゃったの？アイツ・・急に・・・・・」

事情をしらないルーシィはワシ等に聞いてきた。

ミラ
「ナツもロメオ君と同じだからね・・自分とだぶっちゃったのかな。」

ルーシィ
「え？」

カク
「実はナツのお父さんも出ていったきりまだ帰って来ないんじゃよ・・まあ、お父さんと言っても育ての親なんじゃがな。」

ミラ
「しかもドラゴン。」

ガタン！

ワシ等がルーシィにナツの事を話しているとドラゴンに育てられたのに驚き椅子から転げ落ちた。

ルーシィ
「ドラゴン！！？　ナツってドラゴンに育てられたの！！？　そんなの信じられる訳・・・・」

ミラ
「でもね、ナツが小さい時そのドラゴンに森で拾われて言葉や文化や・・魔法なんかを教えてもらったんだって・・・・でもある日ナツの前からそのドラゴンは姿を消したの。」

ルーシィ
「そっか・・それがイグニール・・・・・・・・・」

ルーシィはここまで聞くと思い詰めた顔で少し俯いておる。

カク
「じゃがナツはいつかイグニールに会える日を楽しみにしとると言っておった。」

ミラ
「そーゆートコが可愛いのよねぇ。」

ルーシィ
「あはは。」

そしてミラは手元にあるグラスに入った氷を指で軽く掻き混ぜ始めた。

ミラ
「私たちは・・・・・妖精(フェアリー)の尻尾(テイル)の魔導士たちは・・・・・・・・・みんな・・みんな何かを抱えてる・・・・傷や・・痛みや・・苦しみや・・私も・・」

ルーシィ
「え？」

ミラ
「ううん。何でもない。」

ルーシィ
「・・・・・・・・」

ルーシィは最後にミラが言った言葉に反応したのじゃがよく聞き取れなかったのか詳しくは聞かなかったようじゃ。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　カク

～Ｓｉｄｅ　三人称

ルーシィ
「でね！！　あたし今度ミラさんの家に遊びに行くことになったの～？」

ハッピー
「下着とか盗んじゃ駄目だよ。」

ルーシィ
「盗むかー！！」くわっ

馬車の中では、ルーシィとハッピーがショートコントをしている様な面白い事をしている。馬車の中で揺られているナツは、もちろんダウンしている為少し苦しそうにしておる。

ナツ＆ハッピー
「「てか（それより）何でルーシィとカクがいるんだ（いるの）？」」

ナツとハッピーはどうやらルーシィとカクが着いてきた事が気になっていたのか理由を聞いてきた。

ルーシィ
「何よ。何か文句あるの？」

ハッピー
「そりゃあもういろいろと・・あい。」

不安そうに聞くルーシィの質問に対して何の躊躇(ためら)いもなく、平然と応えたハッピー。しかし、こんな事で落ち込む程ルーシィは弱くなかった。

ルーシィ
「だってせっかくだから何か妖精(フェアリー)の尻尾(テイル)の役に立つ事したいなぁ～・・・・なんて。」

ハッピー
「（株を上げたいんだ！！　絶対そうだ！！）」

カク
「・・ワシはただマカオが心配じゃからじゃよ。同じ仲間としての。」

カクはナツ達に最もらしい意見を言ったのだが、何やらルーシィの意見には何か『裏』があるようだ・・まあ、そこまで悪い事ではないようだが。

ルーシィ
「でも、マカオさん探すの終わったら住む所見つけないとなぁ。」

ハッピー
「オイラとナツん家(ち)の所に住んでもいいよ。」

ルーシィ
「本気で言ったてたらヒゲ抜くわよ猫ちゃん。」

カク
「・・ワシの知ってる物件で値段は少し高いんじゃが良い所を教えようかの？」

ルーシィ
「本当ですか！！　ありがとうございます！！　カクさん！！」

ガタン！

ナツ
「！」

カクとルーシィの話が盛り上がった所で馬車が止まった。そしてそれに気付いたナツはいつもの元気を取り戻した。

ナツ
「止まった！！！」がばっ

ルーシィ
「着いたの？」

ナツは馬車の揺れが止まった事にいち早く気付いたのかナツは座る所から勢い良く飛び起きた。

カク
「聞いてみるかの・・親父(おやじ)さん、着いたんか？」

馬車引きの男
「す・・すんません・・・・これ以上は馬車じゃ進めませんわ。」

ナツ達は馬車の扉を開けると、この時期では考えられない程の雪が吹雪(ふぶ)いていた。

ルーシィ
「！！！　何コレ！！？　いくら山のほうとはいえ今は夏季でしょ！！？　こんな吹雪おかしいわ！！！」

ルーシィは目の前に広がる光景に叫ぶしかなかった。

ルーシィ
「さ・・寒っ！！！」

ナツ
「そんな薄着してっからだよ。」
ルーシィ
「あんたも似たようなモンじゃないっ！！？」
馬車引きの男
「そんじゃオラは街に戻りますよ。」

馬車引きの男は来た道を真っ直ぐに戻っていった。

ルーシィ
「ちょっと！！！　帰りはどーすんのよ！！！」
ナツ
「あいつ・・本当うるさいな。」
ハッピー
「あい」
カク
「・・・・頑張れルーシィ。」ボソッ

さすがにこのままでは何かと可哀想だと思ったのか、カクはルーシィにナツのリュックにあった毛布を借りてルーシィに渡す。

カク
「ナツ、そのリュックにある毛布を貸してもらうぞ。ルーシィ、気休めにでもコレを羽織っておれ。」

ルーシィ
「あ、ありがとうございます。それよりも何でカクさんも平気なんですか？」ガタガタ

カク
「ん？まあその・・ワシの能力じゃよ。ワシに向かって来る『風の速度』を計算して『風の速度』を落としておるんじゃ。」

ルーシィ
「？よく分かりませんが・・凄いんですね。」ガタガタ

まだ寒そうなルーシィは震えながらも腰にある『門（ゲート）の鍵』手をかけ、その中から銀色の鍵を出した。

ルーシィ
「ひひ・・ひ・・開け・・・・・とととと・・時計座の扉・・ホロロギウム！！！」

ナツ
「おお！！」

ハッピー
「時計だぁ！！」

ルーシィは時計の形をした『ホロロギウム』を召喚すると、そのまま中に入ってしまいうずくまってしまった。

ホロロギウム
「『あたしここにいる。』と、申しております。」

ナツ
「何しに来たんだよ。」

ホロロギウム
「『何しに来たといえばマカオさんはこんな場所に何の仕事をしに来たのよ！？』と、申しております。」

そう、ルーシィはマカオがこの山に来て何の仕事をしているのかは何も知らずにナツ達について来たのだ。

ナツ
「知らねえでついて来たのか？凶悪モンスター”バルカン”の討伐だ。」

カク
「無事なら良いんじゃがの。」

ホロロギウム
「『！！！！　あたし帰りたい。』と、申しております。」

ナツ
「はい、どうぞ。と、申しております。」

カク
「直ぐにマカオを見つけてくるから暫(しばら)くの間そこにおるんじゃぞ。と、申しております。」

ナツ達はルーシィの入ったホロロギウムをその場に置いていきマカオを探しに行った。

ナツ
「マカオー！！！　いるかー！！！　バルカンにやられちまったのかーー！！！」

カク
「（見聞色の覇気でこの辺りを探して見るかの・・ん？）・・ナツ、上じゃ！」

ナツ
「！」

ガサッボスッ・・ボスッボスッ・・ばっ・・ドゴォォ！

ハッピー
「バルカンだーー！！！」

カク
「（上にはまだ5体がおるな・・手分けてして倒すかの。）」

カクは見聞色の覇気を使い山にいる筈のマカオを探していたら、上にある崖からバルカンの気配がした。しかし覇気で分かったのは今ここにいるバルカンは1匹ではなく、崖の上にはまだ5匹のバルカンがいた。

バルカン
「ウホ！」しゅばっ

ルーシィ
「！？」

バルカン
「人間の女だ？　うほほーー？」

バルカンはナツ達の隙を見つけて後ろにいるホロロギウムに入っているルーシィを見て興奮したのか、ホロロギウムごとルーシィを攫っていった。

ナツ
「おお！しゃべれんのか。」バスッ

ホロロギウム

「『てか助けなさいよォオオオ！！！！』・・・・と、申しております。」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ　三人称

第００２．０話　総長あらわる！・・・後半（後書き）

なかなか次の話まで進まないのが、天翔る堕天使の最近の悩み・・・・進まねぇ（，Д、）ｙ┻・~~

次回は何とかして頑張っていきたいです。ではまた次回！

ｂｙ天翔る堕天使より

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4563z/

FAIRY TAIL ～妖精の化物《フェアリーモンスター》～

2012年1月11日23時53分発行